

# 中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（3）

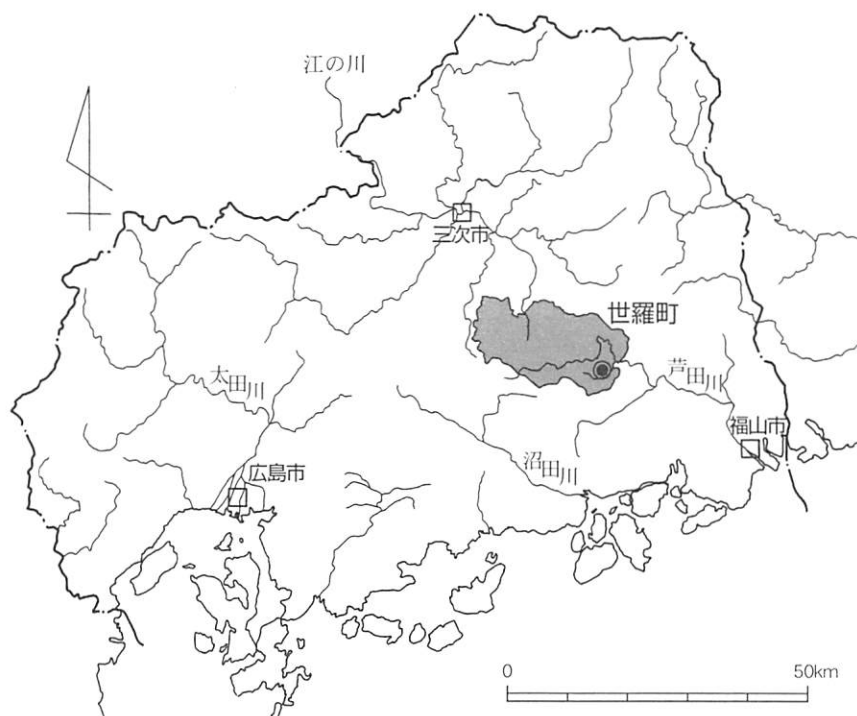
池ノ奥古墳

2007

財団法人 広島県教育事業団

# 中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（3）

## 池ノ奥古墳



世羅町位置図（●は遺跡を示す。）

2007

財団法人 広島県教育事業団

# 例 言

1. 本書は、平成16(2004)年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る池ノ奥古墳(世羅郡世羅町大字宇津戸所在)の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、日本道路公団中国支社(現・西日本高速道路株式会社中国支社)との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
3. 整理作業・報告書作成は、日本道路公団中国支社(現・西日本高速道路株式会社中国支社)及び国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
4. 発掘調査は梅本健治、青山透(現・広島県立歴史民俗資料館)、古瀬裕子(現・広島県立歴史博物館)が担当した。
5. 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は、梅本が中心となって行った。
6. 本書は、梅本が執筆・編集した。
7. 土器の断面については、須恵器は黒ヌリ、そのほかは白ヌキである。
8. 図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。
9. 本書に使用した北方位はすべて平面直角座標第Ⅲ座標系北である。
10. 第2図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000の地形図(甲山・府中)を使用した。
11. 本古墳の石室の石材は、考古地質学研究所 柴田喜太郎氏の肉眼鑑定による。

# 目 次

I	はじめに	(1)
II	位置と環境	(3)
III	調査の概要	(9)
IV	遺構と遺物	(11)
V	まとめ	(22)

# 挿図目次

第1図	中国横断自動車道尾道松江線路線図	(1)
第2図	池ノ奥古墳周辺遺跡分布図(1:25,000)	(5)
第3図	周辺地形図(1:2,000)	(10)
第4図	調査前地形測量図(1:200)	(12)
第5図	墳丘測量図(1:200)	(12)
第6図	墳丘土層断面実測図(1:60)	折込み
第7図	石室実測図(1)(1:60)	(14)
第8図	石室実測図(2)(1:60)	(15)
第9図	出土遺物実測図(1)(1:3, 1:6)	(19)
第10図	出土遺物実測図(2)(2:3, 1:2, 1:3)	(21)

# 表目次

第1表	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る報告書一覧	(2)
第2表	発掘調査された広島県内の主要な横穴式石室	(28)

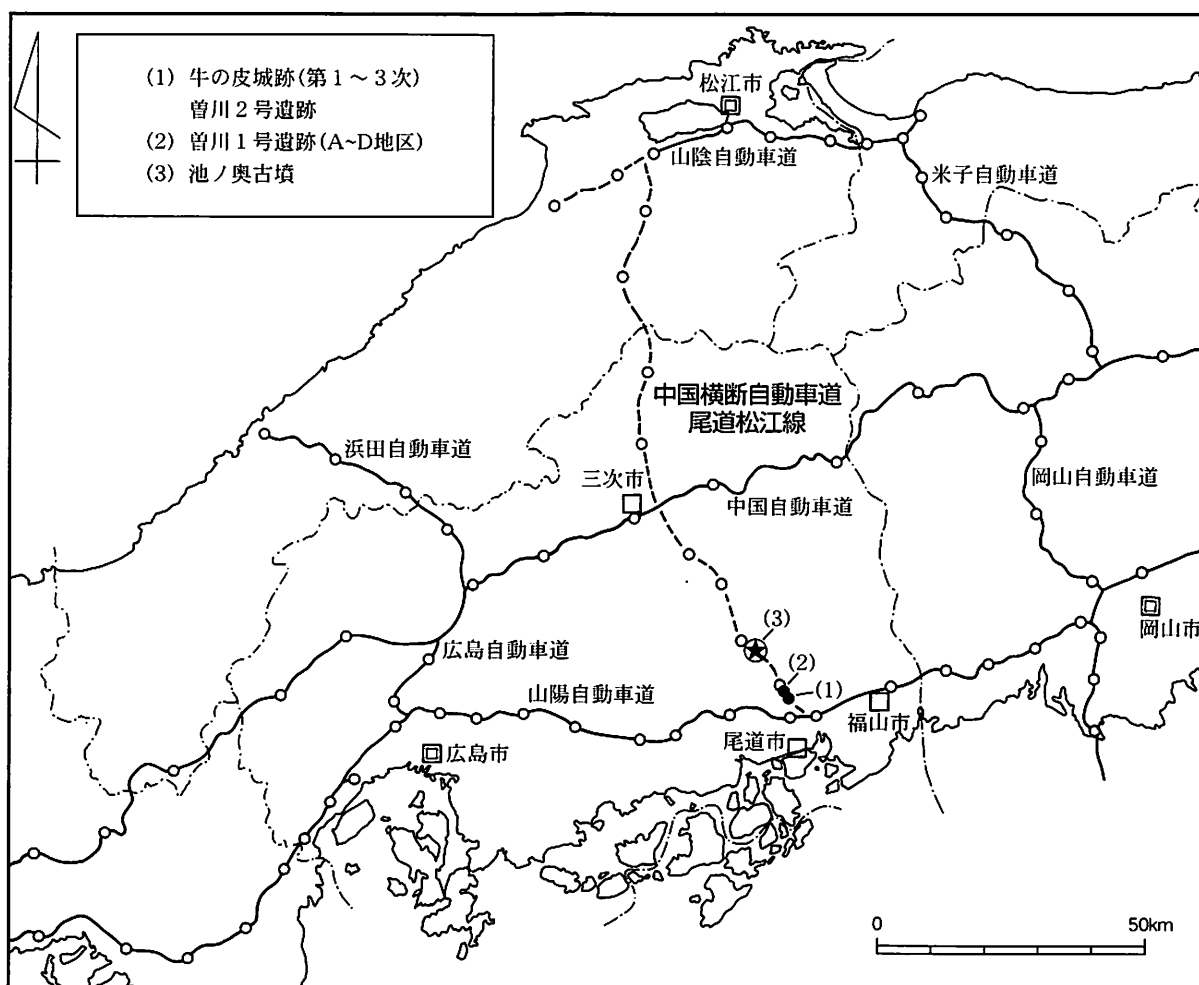
# 図版目次

- |      |   |                      |      |   |                 |
|------|---|----------------------|------|---|-----------------|
| 図版 1 | a | 遺跡遠景（南から）            | 図版 4 | a | 墳丘全景（南西から）      |
|      | b | 全景（調査前，南から）          |      | b | 石室内部（南から）       |
|      | c | 同上（調査後，南から）          |      | c | 閉塞石・平瓶出土状況（東から） |
| 図版 2 | a | 墳丘土層（東西方向西半，<br>南から） | 図版 5 | a | 石室基底石（南から）      |
|      | b | 同上（東西方向東半，南から）       |      | b | 同上（東から）         |
|      | c | 同上（奥壁背後，東から）         | 図版 6 |   | 出土遺物（1）         |
| 図版 3 | a | 石室全景（南から）            | 図版 7 |   | 出土遺物（2）         |
|      | b | 石室西側壁（南東から）          |      |   |                 |
|      | c | 石室東側壁（南西から）          |      |   |                 |

# I はじめに

池ノ奥古墳の発掘調査は中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係るものである。本事業は、本州四国連絡道路尾道今治ルート（瀬戸内しまなみ海道）と一体になって、山陰、山陽及び四国地方を南北に結ぶ地域連帯構想を推進し、本圏域の産業、経済及び文化の発展と沿線地域の生活向上に寄与しようとするものである。

日本道路公団中国支社（以下、「道路公団」という。）は、平成11（1999）年7月、当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて、広島県教育委員会（以下、「県教委」という。）と協議した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い、同年10月事業地内に試掘調査が必要な箇所が存在する旨を回答した。県教委は平成14（2002）年12月に当該箇所の試掘調査を実施し、池ノ奥古墳の存在を確認した旨を平成15（2003）年1月14日に道路公団に回答した。この遺跡の取扱いについて県教委と道路公団は協議を重ねたが、設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。道路公



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線図

団は、平成16(2004)年3月31日付けで県教委あてに「埋蔵文化財発掘の通知(土木工事の通知)」を提出し、県教委は同日付けで道路公団あてに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。道路公団はこれを受けて、平成16(2004)年3月31日付けで財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室(以下、「教育事業団」という。)に池ノ奥古墳(400m)の調査依頼を行なった。道路公団と教育事業団は同年4月1日付けで委託契約を結び、教育事業団は同年8月23日から10月28日までの約2か月間発掘調査を行った。なお、10月2日には世羅町教育委員会と共催で遺跡見学会を開催し、約100名の参加があった。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財の資料として、またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

なお、中国横断自動車道尾道松江線建設事業は、平成17(2005)年10月1日の日本道路公団の解散に伴って西日本高速道路株式会社に引き継がれ、平成18(2006)年度からは国土交通省の直轄事業となった。発掘調査にあたっては、国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社尾道工事事務所、世羅町教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る報告書一覧

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(1)	牛の皮城跡 (北郭群)	第1次	畝状竪堀群	平成15年1月20日～3月14日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	山城跡
		第2次	郭群	平成15年7月7日～10月31日			
		第3次	西竪堀	平成15年11月10日～11月28日			
	曾川2号遺跡			平成15年1月20日～3月7日	尾道市御調町大町字西川	古代末	集落跡
(2)	曾川1号遺跡	A地区	旧・平成14年度調査区	平成14年10月21日～平成15年1月17日	尾道市御調町大町字曾川	弥生・古墳時代～中世	集落跡
		B地区	旧・P2第一	平成15年4月7日～5月23日			
		C地区	旧・P2第二				
		D地区	旧・P1	平成16年1月6日～2月5日			
(3) 本書	池ノ奥古墳			平成16年8月23日～10月28日	世羅郡世羅町宇津戸字天神	古墳時代後期	古墳(横穴式石室)

#### 報告書

- (1) 財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室『牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』2005年
- (2) 財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曾川1号遺跡(A～D地区)』2006年
- (3) 財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳』2007年

## II 位置と環境

池ノ奥古墳は広島県中央部の世羅郡世羅町に所在する。世羅町は平成16(2004)年10月に旧世羅町・甲山町・世羅西町の三町が合併してできた、東西27km、南北15kmと東西に長い町である。古墳はこの世羅町南東部の尾道市との境に近い旧甲山町南部に所在する。世羅町は中国脊梁山地の南側に広がる標高400~600mの世羅台地の中心をなしている。世羅台地の周縁には、北東の岳山(標高738.6m)、西辺を画する白木山山塊の大土山(標高800.1m)、カンノ木山(標高892.1m)、鷹ノ巣山(標高922.1m)など標高700~900m級の山々が連なり、台地内部の各所には黒川明神山(標高535.2m)、男鹿山(標高633.8m)、新山(標高635.0m)などの円錐形の玄武岩鐘が特徴的にみられる。世羅台地は北に流れる江の川、南西に流れる沼田川、東からやがて南に流れる芦田川など主要河川の水源地であり、諸所でこれらの河川相互の争奪が小規模ながら行われている。旧世羅町や旧甲山町の大半では芦田川水系の河川が西から東に台地面を侵食しながら流れ、甲山盆地や宇津戸盆地などの山間盆地を形成している。

世羅町は中世荘園として著名な高野山領大田荘の故地であり、国道184号は倉敷地尾道とを結ぶ往時の往還とほぼ重なる。町内には康徳寺古墳・<sup>じんてん</sup>神田第2号古墳を始めとする多くの特徴的な古墳や康徳寺廃寺、石仏・石塔群や中世寺院跡など、古代・中世の文化財が多く残されている。ここでは、旧甲山町や旧世羅町域を中心に世羅町の歴史的環境について見ていくことにしたい。

**縄文時代** この時代の遺跡は単独で調査されたものはない。別迫の<sup>こうやま</sup>高山1号遺跡<sup>(1)</sup>では谷の埋土から晩期後半の土器が出土しており、平底の精製土器(壺・浅鉢・深鉢)と丸底ないしは尖底に近い粗製土器(深鉢)がある。川尻の<sup>とんざこ</sup>頓迫1~3号遺跡<sup>(2)</sup>は谷奥の南面する緩斜面に立地し、中期後半~晩期の土器片、石鏃・スクレイパーなどの石器や多量の安山岩製の剥片が採集されている。

**弥生時代** 前期は高山1号遺跡・<sup>おつがわきた</sup>乙川北遺跡<sup>(3)</sup>(小世良)で、中期は高田遺跡(伊尾)・高村遺跡(伊尾)・新山遺跡(赤屋)で土器片などが見つかっているが、詳細は明らかでない。<sup>かねいばら</sup>金井原遺跡<sup>(4)</sup>(川尻)では中期の集落跡の調査が行われ、竪穴住居跡・掘立柱建物跡や墓坑を検出した。近重山遺跡(東神崎)は甲山盆地中央の芦田川南岸の丘陵頂部で中期後半の壺・甕が出土し、石列も確認されたことから墳墓の可能性が指摘されている。

後期の遺跡としては<sup>おおとやま</sup>大戸山1,2号遺跡(宇津戸)、<sup>こうごういわ</sup>交合岩遺跡(宇津戸)、日向遺跡(川尻)、<sup>だりゅう</sup>田龍遺跡<sup>(5)</sup>(本郷)、<sup>(6)</sup>藤鞘遺跡(本郷)、<sup>(7)</sup>土居丸遺跡(西神崎)などがあり、後3者では集落跡の調査が行われている。田龍遺跡・藤鞘遺跡は甲山盆地の中心部に近接して存在し、田龍遺跡は芦田川北岸の新山山麓から延びた微高地に立地する。後期後半の比較的短期間に建て替えられた4軒の竪穴住居跡を検出し、2本柱のSB1からはガラス製小玉が出土した。藤鞘遺跡では径7mの大型住居跡の床面に炉跡から間仕切りの溝が放射状に延び、ガラス製小玉が出土した。土居丸遺跡(西神崎)は芦田川南岸の遺跡で、後期頃の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を検出した。



矢ノ迫遺跡<sup>(8)</sup>(重永)は芦田川南岸の丘陵鞍部に立地する弥生時代後期～古墳時代初頭頃の墳墓群で、箱式石棺・土坑墓が南北に並列した状態で検出された。石棺からは人骨が出土した。

なお、土居丸遺跡で2点、龍王山2号遺跡<sup>(9)</sup>(伊尾)で1点、分銅形土製品が出土している。前者はいずれも分銅形、後者は全面に刺突痕をもつ方形板状で、後期前半のものと思われる。

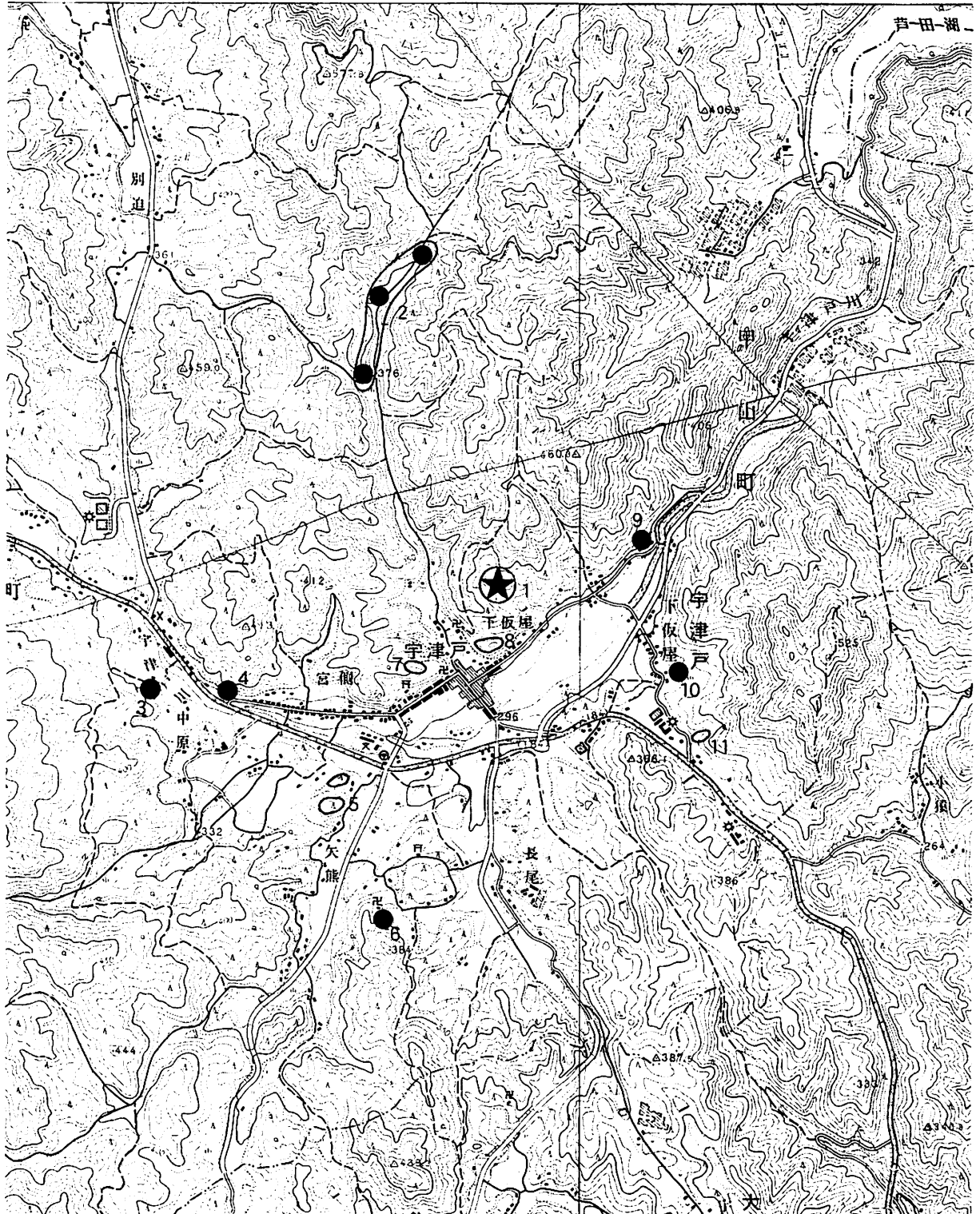
**古墳時代** この時代の遺跡としては古墳、集落跡がある。

前半期の遺跡としては、集落跡の龍王山2号遺跡(伊尾)、近森遺跡<sup>(10)</sup>(伊尾)、土居丸遺跡、千原2号遺跡<sup>(11)</sup>(東神崎)、墳墓群の青山大迫遺跡<sup>(12)</sup>(青山)などの調査が行われている。龍王山2号遺跡は龍王山古墳群がある南北に延びる丘陵裾の緩斜面に立地する古墳時代初頭の集落跡で、竪穴住居跡1軒、土坑墓7基、貯蔵穴4基、祭祀関連土坑1基などを検出している。遺構に伴ってほぼ完形の鼓形土器や甑形土器を始めとする山陰系の土器が多く出土している。また、ほぼ全形が窺える土製カマドが出土した。近森遺跡は低丘陵上にある古墳時代初頭の集落跡で、4軒が重複した住居からは山陰系の甑形土器や土製の勾玉・紡錘車などが出土した。土居丸遺跡でもこの時期の竪穴住居跡2軒を検出し、山陰系の甑形土器や土製支脚が出土した。土居丸遺跡に近接する千原2号遺跡でも竪穴住居跡1軒を検出した。

青山大迫遺跡は芦田川南岸の幅広い谷奥の丘陵東斜面に立地し、箱式石棺4基を検出している。なかでもSK1では、南側を頭位とする上下に重なった状態の男性人骨2体を検出した。

このほか調査は行われていないが、竪穴系の埋葬施設をもつ古墳が多く存在している。龍王山第1・3～5号古墳、龍王山南第1号古墳(以上、伊尾)、松が鼻第1・2号古墳(宇津戸)は箱式石棺、寺上山第5号古墳(賀茂)、矢の迫第1号古墳(重永)、永安寺第8号古墳(中原)などは竪穴式石室を埋葬施設とすると考えられている。

後半期の遺跡には、横穴式石室を埋葬施設とする古墳をはじめ、製鉄遺跡や祭祀遺跡があるが、集落跡は明確なものはない。古墳には、大戸山第1号古墳<sup>(13)</sup>(宇津戸)、龍王山第9号古墳<sup>(14)</sup>(伊尾)、県史跡康德寺古墳<sup>(15)</sup>(寺町)、県史跡神田第2号古墳<sup>(16)</sup>(堀越)、近成山第1号古墳<sup>(17)</sup>(西神崎)、亀ノ尾第1号古墳<sup>(18)</sup>(賀茂)、湯船第6号古墳<sup>(19)</sup>(津口)、風呂之元古墳<sup>(20)</sup>(徳市)、八反田古墳<sup>(21)</sup>(徳市)などがあり、神田第2号古墳以外は発掘調査が行われている。大戸山第1号古墳は池ノ奥古墳の対岸の丘陵南斜面に築かれており、南に開口する小型の石室をもっている。須恵器や馬具が出土し、6世紀末～7世紀初頭頃のものとしてされている。龍王山第9号古墳は、丘陵西斜面に築かれた径8mの円墳で、6世紀末～7世紀代に築造されている。県史跡康德寺古墳(6世紀末築造)・県史跡神田第2号古墳(7世紀中葉頃)・近成山第1号古墳(7世紀後半築造)の3基は甲山盆地中心部の芦田川をはさんで1～2kmの近距離にあり、6世紀末～7世紀代の比較的近接した時期に相次いで築造・使用されている。康德寺古墳は北西から南東に延びる丘陵の突端に立地しており、径17m、高さ5mの周溝をもつ円墳で、南に開口する玄室長5.9m、同幅2.5m、同高さ3.2mの巨大石室をもつ。無袖式で、立柱石・楣石が存在する。神田第2号古墳は芦田川北岸の天神山南麓の丘陵端部に立地し、一辺9m程度の方墳の可能性が高いとされている。石室は横長の玄室に羨道を取り付けたT字形の特異なもので、玄室の各壁は花崗岩の一枚石を用いている。壁面は切石状に加



第2図 池ノ奥古墳周辺遺跡分布図(1:25,000)

- |          |               |          |           |        |
|----------|---------------|----------|-----------|--------|
| 1 池ノ奥古墳  | 2 頓迫1～3号遺跡    | 3 牛岩古墳   | 4 桑の木古墳   | 5 山伝城跡 |
| 6 積善寺古墳  | 7 松が鼻古墳群(2基)  | 8 円寿寺山城跡 | 9 下板屋たたら跡 |        |
| 10 交合岩古墳 | 11 大戸山古墳群(2基) |          |           |        |

工して面取りを行い、玄門部の向かって左側に軸受けをもつ片開きの扉石を嵌め込む。近成山第1号古墳は芦田川南岸の丘陵東斜面に立地し、南側に開口する横穴式石室を埋葬施設としている。径10～15mの周溝をもつ円墳とみられ、石室は基本的に一枚石の天井石の際に割石を1～3段積む。石室の規模は、玄室幅2.4m、同高さ1.5～1.7mと比較的大きい。奥壁寄りの床面には1×2m、厚さ40cmの花崗岩の扁平な割石2枚が据えられ、そのうえに竜山石の可能性のある凝灰岩製の家形石棺の棺材と考えられる長方形の板石が置かれていた。以上3基の特徴的な古墳は、芦田川を介して備南地域、さらには畿内勢力との関わりをもつ在地勢力の存在を窺わせる。亀ノ尾第1号古墳は芦田川北岸の南北に延びる丘陵南西斜面裾部に立地し、南に開口する横穴式石室をもつ。須恵器・土師器のほかには馬具(轡・鍔金具)や耳環が出土しており、6世紀末～7世紀中頃の築造とみられる。湯船第6号古墳は江の川支流美波羅川最上流域の南岸の丘陵南斜面に立地し、南側に開口する横穴式石室をもつ。石室の残りは良くないが、玄室内には敷石・棺台石が存在した。立石南側の羨道から杯蓋・杯身・椀・蓋・罎・脚付椀・平瓶など完形の須恵器が出土し、6世紀後半の築造とみられる。風呂之元古墳は江の川水系黒淵川の谷頭部を望む低丘陵南斜面に立地する径12mの円墳で、6世紀後半～7世紀初頭に築造されたと考えられる。棺台石や鉄釘の存在から2棺以上の木棺が存在したとみられる。装飾須恵器の小壺や似非須恵土師器(長頸壺)が出土した。八反田古墳は馬洗川支流福田川の谷頭を望む丘陵南斜面に立地し、南に開口する横穴式石室を埋葬施設とする古墳で、6世紀末～7世紀初頭頃の築造とみられる。

古墳以外では、竪穴住居跡を検出した康徳寺廃寺<sup>(22)</sup>、カナクロ谷製鉄遺跡<sup>(23)</sup>(黒淵)、祭祀遺跡の宇山遺跡(寺町)、宇根山開拓地遺跡<sup>(24)</sup>(東神崎)、須恵器窯跡の青水窯跡<sup>(25)</sup>(青水)、自光窯跡(賀茂)がある。康徳寺廃寺の寺城南東側で見つかった平面形方形の竪穴住居跡からは多量の土師器(甕・小型壺・小椀など)が出土し、5世紀中葉～後半のものとみられる。カナクロ谷製鉄遺跡は芦田川上流の谷頭に臨む丘陵南斜面裾近くに立地し、製鉄炉2基とその前面に鉄滓捨て場が存在する。南北8m×東西14mの平坦面に構築された製鉄炉はいずれもその炉基底部の平面形から炉床下に防湿のための地下構造をもつ楕円形円筒状のものと考えられ、箱形炉の祖形的な位置付けがされている。素材としては、磁鉄鉱を主とする鉄鉱石と砂鉄の混用が推定されている。操業年代は6世紀末～7世紀はじめ頃と考えられる。宇山遺跡は芦田川北岸の井折谷の谷頭部にあり、工事中に多くの土製品(勾玉形・丸玉形・短甲形・棒状・鏡形・土馬など)や手づくね土器(鉢・罎など)が出土した。6世紀後半～7世紀前半頃のものと考えられ、遺跡の東方2kmの新山山麓に鎮座する式内社和理比売神社との関連が考えられている。宇根山開拓地遺跡は標高698.8mの宇根山から北に流れる芦田川支流に臨む緩斜面から滑石製の子持勾玉が見つかっており、6世紀後半～7世紀代の祭祀に関連する遺跡とみられる。青水窯跡・自光窯跡は旧世羅町南西部に近接して存在する須恵器窯跡で、6世紀後半～7世紀前半頃に操業年代が考えられている。

**古代** 「和名抄」によれば、古代世羅郡には桑原郷・大田郷・津口郷・鞆張郷<sup>(26)</sup>の4郷があり、桑原郷が旧甲山町、大田郷以下の3郷がほぼ旧世羅町にあたとされる。旧甲山町南部の宇津戸は御調郡者度郷<sup>(27)</sup>に比定され、古代山陽道の者度駅の存在を想定する説もある。

古代の遺跡としては、康徳寺麿寺<sup>(26)</sup>、三郎丸瓦窯跡<sup>(27)</sup>（三郎丸）などがある。康徳寺麿寺は甲山盆地の中心部、芦田川北岸の丘陵裾の南緩斜面に立地する。北に講堂跡、南に塔跡と想定される二つの基壇が南北に並び、塔跡の西側に並立して金堂跡が想定される法起寺式の伽藍配置をとると考えられる。白鳳末～奈良時代初期に備後北部の寺院の影響を受けて創建され、やがて奈良時代中期から後期にかけて備後南部の寺院の影響を強く受けたとみられている。軒丸瓦・軒平瓦のほか、鷗尾<sup>しび</sup>や埴<sup>は</sup>仏、塑像の螺髪<sup>らぼう</sup>と推定される土製品などが出土している。三郎丸瓦窯跡は康徳寺麿寺の南1.3kmの対岸、芦田川南岸の細長い谷奥の丘陵西斜面に立地する地下式有段構造の登窯で、康徳寺麿寺に丸瓦・平瓦を供給した瓦窯跡と考えられている。

**中世** 平安時代末期に平重衡が後白河院に寄進して立券された大田荘は、世羅町を中心に広大な荘域をもつ全国でも有数の中世荘園である。この大田荘は平家滅亡後高野山（金剛峯寺根本大塔）領となる。当初、高野山は開発領主の系譜を引く下司橘氏の度重なる非法に苦しめられるが、幕府の裁定により橘氏の諸職は没収され、有力御家人の三善氏が新たな地頭となる。しかし、承久の変以後、強化された幕府権力を背景にその勢力を伸張させた地頭三善氏と高野山の荘務権の内実をめぐる対立・抗争が鎌倉時代を通じて激しさを増していく。そして、南北朝の動乱以後中世後期にかけて、備後国守護山名氏の勢力の浸透などにより高野山の大田荘支配は形骸化し、中小土豪のみで有力な武家勢力のいなかった世羅台地に、備後北部の山内・三吉・田総<sup>たぶさ</sup>・和智<sup>わち</sup>氏や南部の杉原・小早川氏など周辺諸勢力の侵攻を許し、押領や違乱が繰り返されるようになる。やがて、応仁の乱を契機に周防大内氏、更には出雲尼子氏の備後国への侵攻がはじまり、抗争の坩堝と化す。そして、16世紀半ばには大内氏、次いで尼子氏が相次いで新たに台頭した安芸国人毛利氏によって滅ぼされ、その支配下に世羅台地も組み込まれてゆく。

中世の遺跡としては、城跡・居館跡・墓などがある。城跡としては、今高野山城跡（甲山）、山伝城跡（宇津戸）、円寿寺山城跡（宇津戸）などがあるが、規模の大きなものは少なく、城主や築城時期・経緯などは殆ど分かっていない。今高野山城跡は主郭の南北に各2段の小郭を配し、南側には堀切を設けている。主郭の北には出丸がある。山伝城跡は南側に主城、北側に出丸がある。主郭の西側背後は2本の堀切により防御し、北側には豎堀2と思われるものがある。出丸は広大な郭で、西側に堀切がある。円寿寺山城跡は1郭の北西側には帯郭と豎堀2条が、南西側2.5m下には2郭がある。中央やや東寄りに豎堀状の凹みがあり、3郭へ続く虎口と思われる。この3郭は2郭の約10m南下にある帯郭で、東端部の切岸は不明瞭である。居館跡には沼城跡（西上原）などがある。沼城跡は変形五角形の居館跡で、北西側が一段高くなっている。大通土居屋敷跡<sup>(28)</sup>（伊尾）の発掘調査では、室町時代の掘立柱建物跡・溝・土坑などを検出している。

宮ヶ森古墓群（重永）は、谷を見下ろす小高い場所に立地する中世末～近世初頭の積石基壇をもつ5基の古墓からなる。第2号古墓は積石基壇下の二段掘りの墓坑から、土師質土器・杯と紐で繋がれた6枚の古銭（開元通宝など）が出土した。第4号古墓は2基の積石基壇下に計3基の墓坑があり、3号墓坑から土師質土器・杯、皿、鉄釘、古銭（皇宋通宝・元祐通宝）が出土した。

## 註

- (1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「高山1号遺跡」『高山1・2号遺跡』 1992年
- (2) 小都隆「世羅郡甲山町頓迫遺跡について」『芸備』第5集 芸備友の会 1977年
- (3) 平成11(1999)年度に甲山町教育委員会が発掘調査を実施した。
- (4) 平成17・18(2005・2006)年度に財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。
- (5) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『田龍遺跡』 1997年
- (6) 河瀬正利「藤鞘遺跡」『日本考古学年報』21・22・23 日本考古学協会 1981年
- (7) 世羅町教育委員会『土居丸遺跡Ⅰ』 1993年  
世羅町教育委員会『土居丸遺跡Ⅱ 青山大迫遺跡』 1996年  
世羅町教育委員会『土居丸遺跡Ⅲ』 1999年
- (8) 世羅町教育委員会『矢ノ迫遺跡』 1997年
- (9) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『龍王山2号遺跡』 1997年
- (10) 平成17(2005)年度に財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。
- (11) 世羅町教育委員会『千原第2号遺跡』 2000年
- (12) 世羅町教育委員会「青山大迫遺跡」『土居丸遺跡Ⅱ 青山大迫遺跡』 1996年
- (13) 平成17(2005)年度に世羅町教育委員会が発掘調査を実施した。
- (14) 龍王山古墳群発掘調査団「第9号古墳」『龍王山古墳群 第9号古墳・第10号古墳の発掘調査報告』  
1971年
- (15) 世羅町教育委員会『康徳寺古墳』 1997年
- (16) 是光吉基「扉を有す一古墳について」『広島県文化財ニュース』第60号 広島県文化財協会 1974年  
脇坂光彦「神田2号古墳の測量調査」『芸備』第18集 芸備友の会 1987年  
小都隆「神田第2号古墳」『広島県文化財ニュース』第116号 広島県文化財協会 1988年
- (17) 世羅町教育委員会『近成山第1号古墳調査概報』 1991年
- (18) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『亀ノ尾第1号古墳発掘調査報告書』 2000年
- (19) 世羅町教育委員会『湯船第6号古墳』 1995年
- (20) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『風呂之元古墳発掘調査報告書』 1999年
- (21) 広島県教育委員会 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『八反田古墳』 1981年
- (22) 広島県世羅郡世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺-第2次発掘調査概報-』 1993年
- (23) 潮見浩「カナクロ谷製鉄遺跡」『広島県文化財ニュース』第116号 広島県文化財協会 1988年  
藤野次史・土佐雅彦「カナクロ谷製鉄遺跡」広島大学文学部考古学研究室編『中国地方製鉄遺跡の研究』  
溪水社 1993年
- (24) 是光吉基「広島県世羅出土の祭祀遺物」『月刊考古学ジャーナル』No.5 ニューサイエンス社 1967年
- (25) 波田一夫・是光吉基「広島県世羅郡東神崎出土の子持勾玉」『月刊考古学ジャーナル』No.34 ニューサイエンス社 1969年
- (26) 広島県世羅郡世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺-第1～3次発掘調査概報-』 1992～1994年  
広島県世羅郡世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺-発掘調査報告-』 1995年
- (27) 広島県世羅郡世羅町教育委員会「三郎丸瓦窯跡」『備後康徳寺廃寺-発掘調査報告-』 1995年
- (28) 平成8・9(1996・1997)年度に甲山町教育委員会が発掘調査を実施した。
- (29) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『宮ヶ森第1～5号古墳』 1998年

## 参考文献

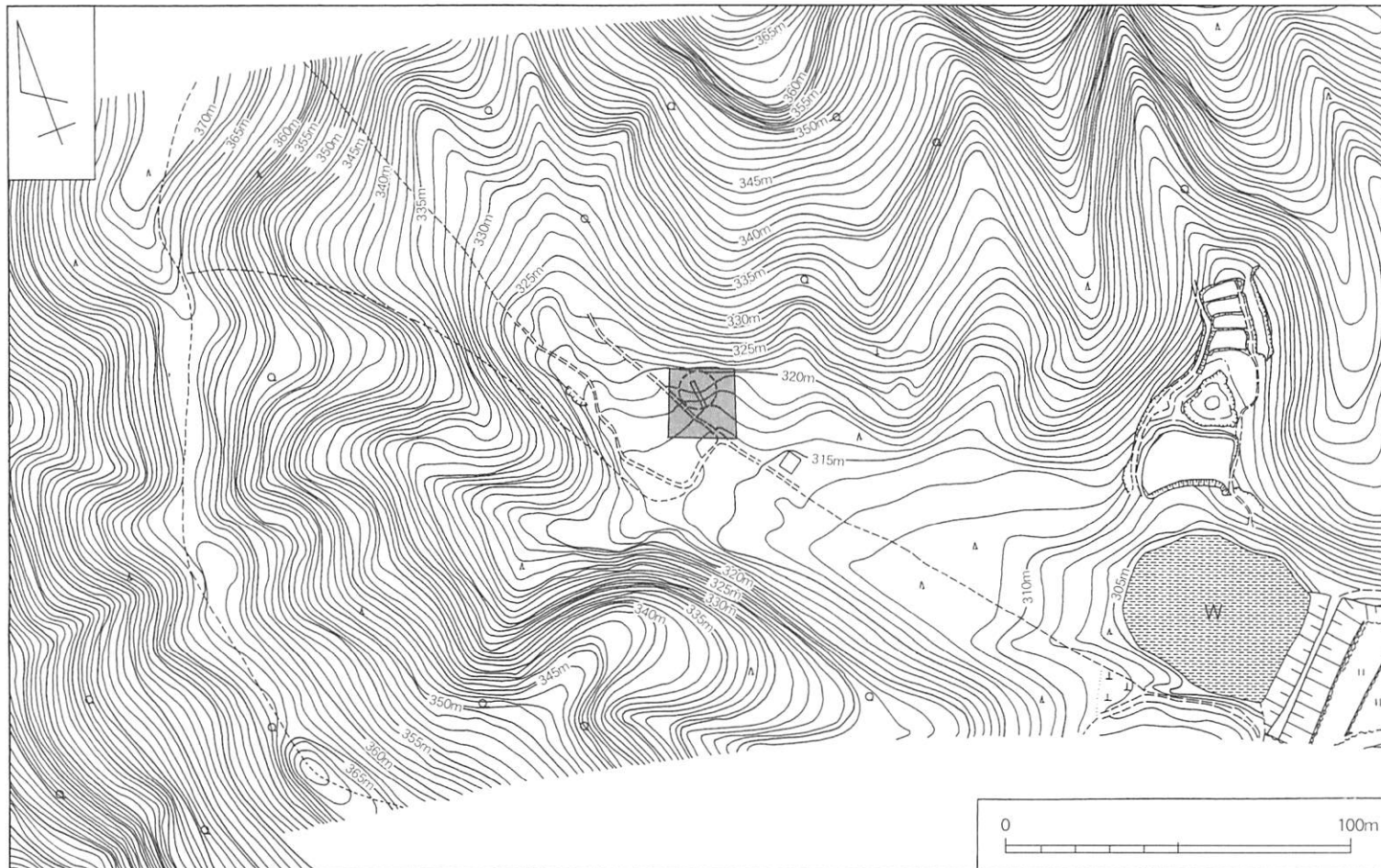
- ・ 是光吉基「世羅郡内の遺跡」『広島県文化財ニュース』第77号 広島県文化財協会 1977年
- ・ 広島県『広島県史』考古編 1979年
- ・ 広島県『広島県史』中世 通史Ⅱ 1984年
- ・ 甲山町史編纂委員会編『甲山町史』資料編Ⅰ 甲山町 2003年

### Ⅲ 調査の概要

池ノ奥古墳は世羅郡世羅町大字宇津戸に所在する横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。世羅町南東部の、ほぼ西から東に流れる芦田川支流宇津戸川の北岸に広がる丘陵の一角に位置する。東から西に延びる狭小な谷奥に臨む丘陵裾部の緩斜面上に立地する（標高320m、水田面からの比高約20m）。

古墳が存在する宇津戸地区は世羅町の南東端に位置し、宇津戸川沿いに幅200～300mほどの狭小な平野部がみられるだけで、周囲は標高400～600mの山塊に囲まれている。その中心部を中世荘園の高野山領大田荘から尾道に延びる物資輸送の幹線が貫いている。また、本地区はその立荘時期や領主については不明であるが、14～15世紀頃に存在した海裏荘<sup>うつと</sup>の荘域の中心と考えられている。周辺には、横穴式石室をもつ古墳として積善寺古墳<sup>しやくぜんじ</sup>や大戸山古墳群<sup>おおとやま</sup>などがある。

調査は、墳丘に十字に土層観察用の畦を残して行ったが、畦は石室の中軸から外れ、斜交する結果となった。直径10mほどの円墳で、墳丘の背後を中心に半円形の周溝が存在する。横穴式石室は長さ6.12～6.60mの無袖のものである。出土遺物は石室内・墳丘ともごく少なく、玄室奥壁寄りの床面で耳環1対、羨道から完形の須恵器・平瓶や台付長頸壺が、石室西側の墳丘裾から須恵器・大甕片が集中的に出土した。



第3図 周辺地形図(1:2,000, アミ目は調査区を示す)

## IV 遺構と遺物

### (1) 立地と調査前の状況(第3・4図, 図版1b)

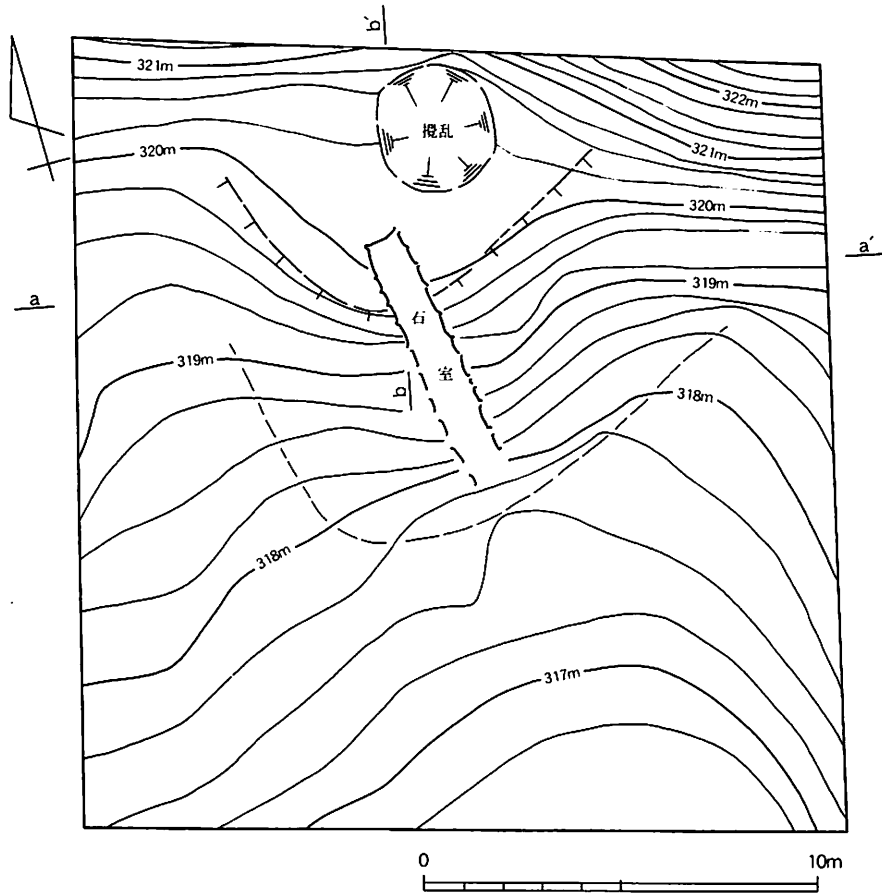
池ノ奥古墳は、世羅町南東部の芦田川支流宇津戸川北岸の丘陵の一角に位置する、横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。古墳は、宇津戸川に沿って開けた狭長な平野部から北西方向に切れ込んだ幅40m、長さ300mのごく小さな谷筋の最も奥まった個所の、丘陵裾の南側緩斜面に立地する(標高320m)。古墳は山道が通る谷の底から1~2m高いごく緩やかな斜面につくられているが、墳丘の背後には標高約420mの丘陵の南側急斜面が迫る。なお、古墳周辺の地目は山林で、古墳の東側や南側には比較的最近まで火葬場が存在しており、ある程度後世の攪乱や削平を受けている可能性はある。

### (2) 墳丘・周溝(第5・6図, 図版1c)

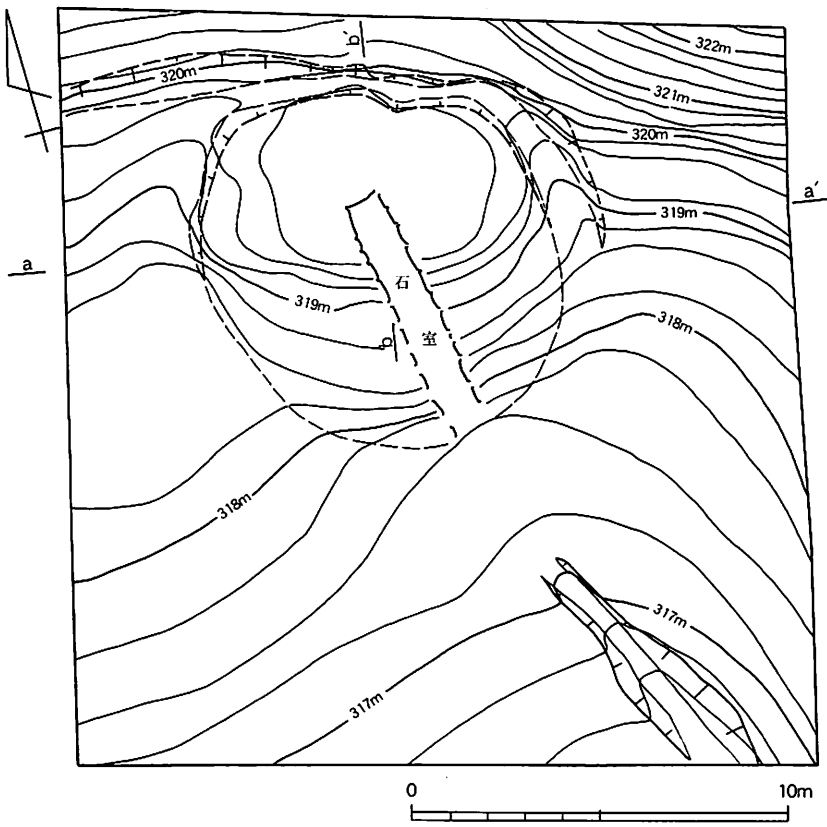
調査前の古墳は、丘陵南側の急斜面下に半円形に突出した東西10m、南北6m、高さ2mほどのごく低い台状の平坦面とみられ、明確に墳丘を捉えることはできなかった。検出した墳丘はやや歪な南北方向に長い楕円形気味の円形で、南北9.8m、東西9mの規模である。墳丘の高さは石室背後の周溝底面最高所から墳頂部までで0.2m、石室入口付近の墳丘裾から墳頂部までで2.5mである。墳丘の東側から北側にかけて周溝が廻る。この周溝は墳丘北西部で広がっており、墳丘西側から南側にかけては存在しない。すなわち、墳丘北東側を中心に墳丘全体の2/5~1/3周程度を廻るにすぎない。これは、周溝が墳丘背後の地形に合わせて掘り込まれたためと思われる。つまり、墳丘北東側には南にやや突出した斜面があり、この斜面の付け根部分を中心に逆L字状に斜面を掘削して古墳を築いたものと考えられる。周溝の規模は、幅0.5~2m、深さ20~70cmで、墳丘東側が最も深く、石室背後の墳丘北側が最も浅い。

墳丘の盛土は現状での厚さ(最大)1.8mほどである。基本的には、淡黒色土(第11層)、明黄褐色土(第12層)、暗黄褐色土(第13層)、暗黄褐色砂質土(第14層)と石室天井石付近から上方は安定した土盛がなされているが、石室天井石付近から石室掘方上面の間は、石室の西側は淡褐色砂質土(第15・16層)、黒褐色土(第17層)、褐色土(第18・20層)、暗褐色土(第19層)、東側は黄褐色土(第21層)、暗黄褐色土(第22・24・25層)、黒褐色土(第23層)と、前者が淡褐色・褐色土系の土であるのに対して、後者は黄褐色・暗黄褐色系盛土と黄色味が強くなっている。盛土の基盤は標高318.5m付近で、基盤土は墳丘下はほぼシルト質の黒褐色~灰黒色土、墳丘外は西側が非常に締まりの良い灰黒色粗砂質土、東側は明黄褐色~淡橙色砂質土である。墳丘直下のシルト質の土は北西-南東方向に走る幅6mほどの谷筋の埋土である。これらのことから、本古墳は、丘陵裾の急斜面から緩斜面に移行するあたりを削平して基盤とし、その上に掘削して得られた旧谷筋埋土(シルト質の黒褐色土)と墳丘東側に主にみられる地山土(明黄褐色~淡橙色砂質土)を主体的に盛って墳丘を築いたものと考えられる。

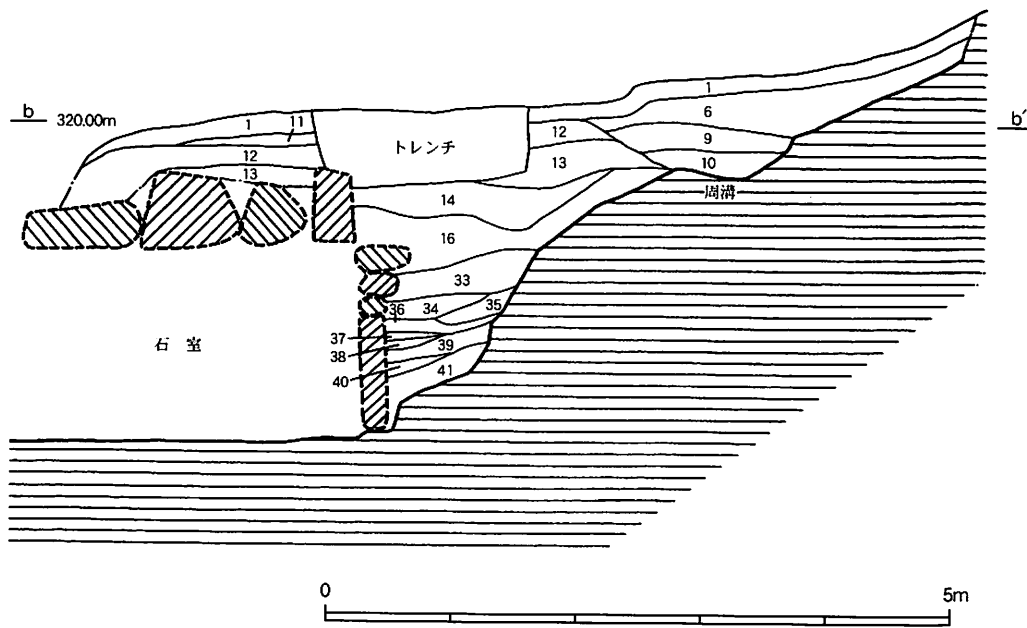
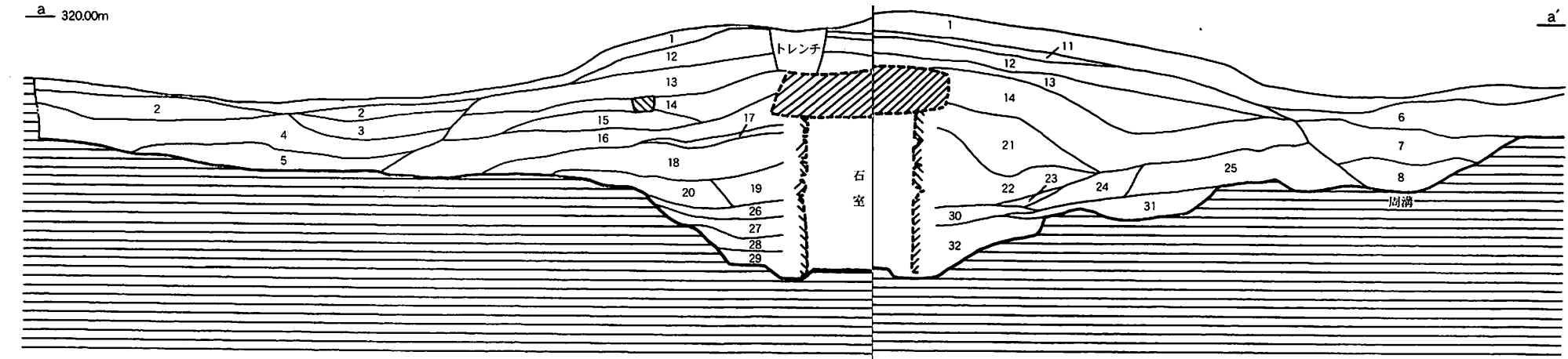




第4図 調査前地形測量図 (1:200)



第5図 墳丘測量図 (1:200)



- |             |                             |
|-------------|-----------------------------|
| 1. 表土 (褐色土) | 21. 黄褐色土                    |
| 2. 淡褐色土     | 22. 暗黄褐色土                   |
| 3. 淡褐色土     | 23. 黒褐色土                    |
| 4. 淡褐色土     | 24. 暗黄褐色土                   |
| 5. 褐色土      | 25. 暗黄褐色土                   |
| 6. 黄褐色土     | 石室掘方埋土                      |
| 周溝埋土        | 26. 淡黒褐色土                   |
| 7. 淡褐色土     | 27. 黒褐色土 (明黄褐色粘質土をブロック状に含む) |
| 8. 褐色土      | 28. 暗褐色土 (明黄褐色粘質土をブロック状に含む) |
| 9. 暗黄褐色土    | 29. 暗褐色土 (明黄褐色粘質土をブロック状に含む) |
| 10. 暗黄褐色土   | 30. 淡褐色土 (少量の黄褐色土を含む)       |
| 墳丘盛土        | 31. 淡褐色土 (黄褐色土を含む)          |
| 11. 淡黒色土    | 32. 灰黒色土                    |
| 12. 明黄褐色土   | 33. 淡褐色土 (黄褐色土ブロックを含む)      |
| 13. 暗黄褐色土   | 34. 褐色土 (黒褐色土をブロックを含む)      |
| 14. 暗黄褐色砂質土 | 35. 暗黄褐色土                   |
| 15. 淡褐色砂質土  | 36. 褐色土 (黒褐色土ブロックを多く含む)     |
| 16. 淡褐色砂質土  | 37. 黄褐色粘質土                  |
| 17. 黒褐色土    | 38. 淡褐色土                    |
| 18. 褐色土     | 39. 黄褐色砂質土 + 黒褐色土 (互層状)     |
| 19. 暗褐色土    | 40. 淡褐色土 (薄い黒色土を多く縞状に含む)    |
| 20. 褐色土     | 41. 淡褐色土 (薄い黒色土を縞状に含む)      |

第6図 墳丘土層断面実測図 (1:60)

### (3) 石室(第7・8図, 図版3～5)

本古墳の埋葬施設はほぼ南方向に開口する横穴式石室である(石室の主軸N11°W)。石室の規模は、長さが西側壁側で6.60m, 東側壁側で6.12m, 幅が玄室奥壁側で0.84m, 玄室最大幅1.02m(奥壁から入口側に1.2mの個所), 立石部分で0.98m, 羨道最大幅1.04m(奥壁から入口側に4.4mの個所), 羨道入口(東側壁先端部)0.9m, 高さは玄室奥壁側で1.52m, 立石付近(天井石先端)で1.4mである。幅が玄室で0.84～1.02m, 羨道で0.9～1.04mと最大18cmの差とほぼ一定で, 石室の平面形は長方形である。奥壁から西側壁で2.84～3.28m, 東側壁で2.96～3.40mのところにある立石(両側壁とも奥壁から6個目の基底石)を境に基底石をはじめとして石材の積み方に差異がみられることから, この部分が石室の玄室と羨道の境と考えられる。ただ, いずれの立石も平面的には石室内側への突出はみられない。石室は, 地山を掘り込んだ掘方内のやや東側に寄せて構築されている。石室掘方は, 北～北東～東から南～南西方向に緩やかに傾斜する地面を掘り込んであるので, 石室奥側のほぼ玄室部分のみにみられ, 羨道部分には掘方は殆どみられない。掘方の大きさは, 現状で長さ3.6m, 幅3.4m, 深さ1.18m(最大)である。石室の4m前方には墓道の可能性のある溝状遺構が南東方向に延びている。その現状の規模は, 長さ7.6m, 幅0.6～1.8m, 深さ10数cmである。石室を構築している石材は, 大半が黒雲母花崗岩で, ごく一部高田流紋岩系の石英斑岩と半花崗岩がみられる。黒雲母花崗岩は周辺の基盤をなす石材で, 高田流紋岩・半花崗岩は古墳の西方宇根山東麓の丘陵などに産出し, いずれも地元で比較的容易に入手できるようである。

①羨道 長さは立石先端から羨道基底石先端までとし, 西側壁側で3.3m, 東側壁側で2.72mである。西側壁側は先端側で最大12cm内側へ寄るが, 東側壁側はほぼ直線的である。

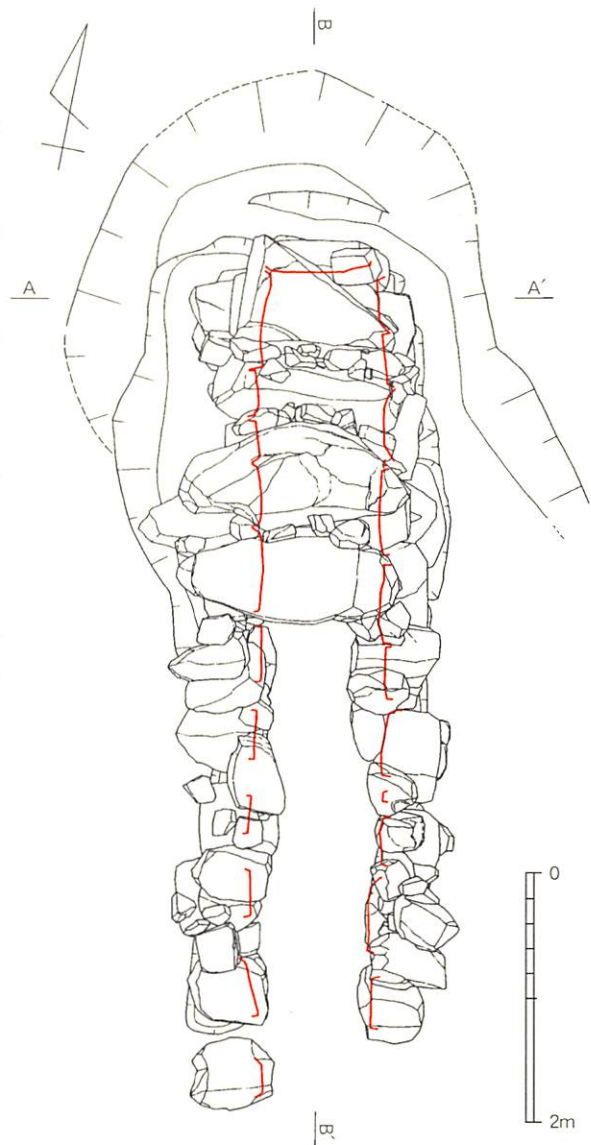
基底石の据え方・形状や基底石上の石材の積み方など, 玄室のそれらに比べると全体に乱雑で不整である。西側壁は, 基底石5個でその上に現状で1段程度の石積みが見られる。基底石は, 立石の南側に幅67cm, 高さ42cm, 奥行き65cmの石材を横積みにし, その南側に幅50cm, 高さ80cm, 奥行き40cmの石材を縦長に立てている。この石の南側には幅60cm, 高さ54cm, 奥行き60cm及び幅60cm, 高さ48cm, 奥行き60cmの石材をいずれも小口積みにする。そして, 10cmほど間隔をあけて羨道部先端には, 幅55cm, 高さ32cm, 奥行き60cmの石材を小口積みにしている。立石の南2個目の石は縦長に立てているが, 他はいずれも60cm大, 厚さ32～54cmとほぼ同じ大きさの方形の石材を寝かせて小口積みあるいは横積みにしている。これら基底石の上には30～60cm大の比較的角のとれた角礫を, やや不整な基底石の上面に生じた凹凸を埋めるようにやや乱雑に積んでいる。東側壁は, 基底石4個でその上に現状で2～3段程度の石積みが見られている。基底石は, 立石のすぐ南側に幅・高さともに70cm, 奥行き80cmの不整形の大型石材を横積みにし, その南側には幅70cm, 高さ62cm, 奥行き46cmの比較的整美な大型の角礫を立てている。立石の南側3個目には幅55cm, 高さ53cm, 奥行き30cmの三角形の石材を頂点が上になるように置いている。そして, 羨道部先端には幅66cm, 高さ50cm, 奥行き51cmの石材を横積みにしている。西側壁同様, 立石の南側2個目の基底石を立てて, 他は石材を寝かせている。基底石の石材は一辺50～80cm, 厚さ30

～70cmの大きさで、形状は立石のすぐ南側の石材や先端から2個目の石に見られるように三角形など不整形なものが目立つ。よって、基底石上の石積みはその凹凸を埋めるように置かれるため、特に羨道部入口側で乱雑である。基底石上の石積みは30～50cm大、厚さ10～30cmの比較的扁平な石を小口積みにしているが、乱れが顕著な先端側2個の基底石上には30～40cm大の比較的厚みのある角礫が積まれている。なお、立石の南側2個の基底石は、その外側の底面に詰石がなされ、石材の外側（東側）への転倒を防いでいる。詰石に用いられている石は30～40cm大、厚さ10cmほどの板状の石1～2枚である。羨道部分の側壁の床面からの高さは、現状で西側壁が30～88cm、東側壁が45～112cmである。

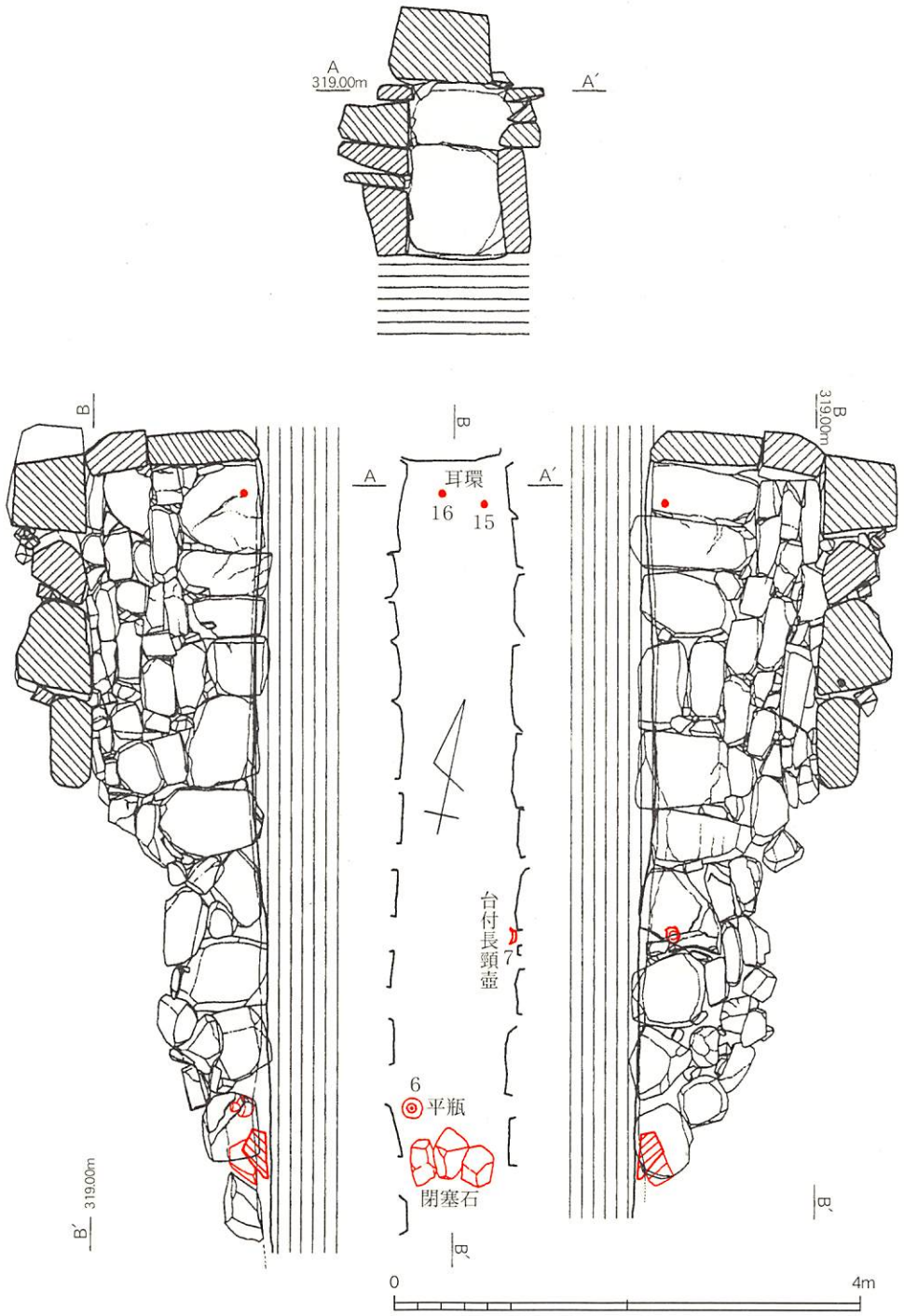
このように、羨道部側壁の石積みの状況は、50～60cm大の厚みのある比較的不整形の角礫を4～5個寝かせて基底石とし、その凹凸の顕著な上面に主に30～40cm大の板状の石を1～3段程度小口積みにしている。用いられている石材は不整なものが多く、石材の据え方や石積みの仕方は全体に乱雑である。

②閉塞石 西側壁の先端から2個目、東側壁の先端に閉塞石がある。30～40cm大の角礫3個を並べ、羨道入口を塞いでいる。現状は高さ20～30cmに過ぎないが、本来はより高く積まれていたと考えられ、閉塞石の基底部分と考えられる。

③天井石 現状で奥壁から2.66m、5個目の基底石付近まで計4枚の石材を構築して天井石としているが、立石や側壁の状況から考えると南にもう1枚あった可能性がある。最も奥側の石材が84cm×126cm、厚さ64cmの三角形の分厚い板状のもの、奥から2番目の石材は60cm×154cm、厚さ50cmの棒状の角礫、奥から3番目は84cm×186cm、厚さ64cmの不整長方体状の分厚く最も大きな石材、そして先端の天井石はこれに比較的似た不整長方体状の、76cm×166cm、厚さ37cmとやや薄いのが2番目に大きい石材を構築させている。即ち、石室入口側に大きめの石材を置き、奥側にはやや小ぶりの石材を構築していることになる。特に、奥壁に載せている最奥部の三角形の石材は底辺を奥から2番目の天井石に沿わせているために、奥壁に載るべき部分が三角形の頂点付近になり、しっかり奥壁に載っていない。その、特に東側にできる



第7図 石室実測図(1) (1:60)



第8圖 石室実測図(2) (1:60)

隙間を塞ぐために別に30cm大の板状の石を詰めている。天井石の下面はやや下傾しながらもほぼ面を揃えているが(傾斜角度 $2^{\circ}$ )、用いた石材に比較的厚薄があるために、上面は14~27cmと凹凸が顕著である。天井石間は最大8cmの隙間があり、また石材の断面が基本的に台形状をなすため上面に谷間が生じ、その部分に数~40cm大(10~30cm大が主)の小角礫を詰めて隙間や凹部を塞いでいる。特に、最も奥側と奥から2番目の天井石間、奥から2番目と3番目の天井石間の隙間や凹凸が顕著であるので、これらの個所には数個から10個程度の礫を詰めている。それに対して奥から3番目と先端の天井石間は4個と比較的詰石の数は少ない。

④**玄室** 玄室の長さは、奥壁から立石までで西側壁側が3.40m、東側壁側が3.48mで、両側壁はほぼ平行である。玄室部分の石積みは立石を介して羨道部のそれとは大きく異なり、かなり整然としたものになっている。基底石に大型の石材を用い、その上に西側壁で4~5段、東側壁で3~4段、20~80cm大の板状の石を積み上げている。壁面はほぼ垂直で、持ち送りはみられない。奥壁は大型で分厚い板状の石2枚を上下に重ねて立てている。上段の石を若干前傾させているが、壁面はほぼ垂直である。両側壁と奥壁が接する部分はいずれもほぼ直角で、側壁最奥部の石材の端面を奥壁の石材の壁面に当てている。基底石は奥壁、最奥部の両側壁、東側壁の立石は掘方底面に据え置いているのみだが、その他の基底石は掘方底面を10~20cm程度掘り窪めて据えている。概して、西側壁の基底石は7~15cmと比較的浅いが、東側壁の基底石は10数~20cmと掘方底面をやや深く掘り込んで据えており、このことは石室が掘方のやや東側に寄せて構築されていることと関わりがあると思われ、石室が東側壁を基準に造られた可能性がある。

**西側壁** 立石を含めて計6個の基底石を用いている。石材は最奥部、奥から4個目、立石が大きく、奥から2~4個目はやや小ぶりである。最奥部は幅55cm、高さ74cm、奥行き50cmの石材を縦長に立てている。掘方底面をごく浅く掘り窪めて石材を据えている。奥から2個目は幅45cm、高さ82cm、奥行き30cm、奥から3個目は幅37cm、高さ66cm、奥行き25cmの似た形状の石材を縦長に立てている。いずれも掘方底面を12~13cmほど掘り窪めて石材を据えている。奥から4個目の石材は幅45cm、高さ54cm、奥行き60cmの石材を寝かせて小口積みしている。掘方底面を15cm掘り窪めている。奥から5個目の石材は幅74cm、高さ64cm、奥行き43cmの石材を横長に立て、掘方底面を11cm掘り窪めている。立石は幅60cm、高さ90cm、奥行き26cmの石材を縦長に立てている。掘方底面を11cm掘り窪めて石材を据えている。最奥と奥から2個目の石材が床面から70~74cm、立石が77cmとほぼ70cm余りの高さであるのに対し、これらに挟まれた奥から3~5個目の石材が4個目の石材を最低に床面から38~55cmと上面が大きく窪む。この窪んだ部分に幅60cm、高さ30cmの石を横積みすることで基底石上面の床面からの高さを70cm余りに揃えている。これら6個の基底石の上に幅20~60cm、高さ10~30cm(奥行き不明)の板状の石材を4~5段寝かせて積み上げている。天井石直下の最上段に幅20~30cm、高さ10~10数cmの小ぶりの板石を詰石のように用いるが、主体は幅30~60cm、高さ10数~30cmとやや大型の石材である。石材の長辺の側面を石室内側に向ける横積みと短辺の側面を向ける小口積みのものがほぼ半数ずつみられる。概して、角張った板状の石材は横積みであることが多く、小口積みは幅・高さが20~30cm程度で奥行きが長い太目の棒

状の角礫であることが多い。なお、それほど多くはないが石材間に10～10数cmの大きさの小礫を詰めている。

**東側壁** 立石を含めて計6個の石材を基底石としている。これらの基底石は40～57cm×70～108cm、厚さ30～45cmと比較的大きさが揃っている。形も比較的整美な長方体の分厚い板状である。最奥、奥から2個目、立石の上面(床面から80～90cmの高さ)が基底石上面の高さで、奥から3～5個目のやや低い基底石は上に1～2段石積みをして高さを揃えている。基本的には、西側壁同様奥から3～5個目の基底石の上面が4個目を最低に低くなっており(床面から26～69cm)、この部分に1～2段、幅34～74cm、高さ24～32cmの石材を横積み・小口積みすることで、床面からの高さを揃えている。最奥の基底石は幅40cm、高さ90cm、奥行き45cmの石材を縦長に立てている。掘方底面を掘り窪めることなく石材を据え置いている。奥から2個目の基底石は、幅40cm、高さ108cm、奥行き30cmの石材をやはり縦長に立てている。掘方の底面を18cmと比較的深く掘り窪めて石材を据えている。奥から3個目の基底石は床面からの高さが69cmと奥壁側の2個の基底石に比べると20cm余りも低い。上面に幅36cm、高さ24cmの石材を積んで上面の高さを揃えている。この基底石は幅57cm、高さ82cm、奥行き30cmのやや不整な石材で、縦長に立てている。石材は床面を10cm余り掘り窪めて据えている。奥から4個目の基底石は他の基底石と異なり、唯一石材を寝かせて置いている。幅70cm、高さ43cm、奥行き50cmの石材を横積みになっている。掘方底面を16cmと比較的深く掘り込んで据えているので、床面から26cmの高さしかなく、ほかの基底石の上面の高さに比べると50～60cm余り低い。それで、基底石の上に幅74cm、高さ32cmとほぼ同規模の石材を横積みし(実質的にはこの石材を含めて2個で基底石の役割を果たしていると考えられる)、その上に幅50cm、高さ20～30cmほどのやや小ぶりの角礫を1段積んで、上面の高さをほぼ揃えている。奥から5個目の基底石は、幅55cm、高さ80cm、奥行き40cmの石材を縦長に立てている。掘方底面を20cmと深く掘り込んで石材を据えているので、床面からの高さは60cm余りと、ほかの基底石の上面に20～30cmほど足りない。よって、基底石の上面に幅44cm、高さ24cmの小型の石材を積んで、上面の高さを揃えている。立石は幅45cm、高さ85cm、奥行き30cmの石材を縦長に立てている。掘方底面を数cmとごく浅く掘り窪めて石材を据えており、床面上80cmの高さを保っている。

基底石の上には、幅20～80cm、高さ10～30cm(奥行き不明)ほどの大きさの板状の石材を主体に3～4段積み上げている。天井石直下の最上段には小ぶりの板石を詰めるが、主体は幅30～70cm、高さ10数～30cm程度のやや大型の石材である。西側壁のように長い太目の棒状の石材の小口面を石室内に向ける小口積みは立石付近と奥から3個目の基底石上の石材以外には見られず、主体は石材の長辺の側面を石室内に向ける横積みである。なお、一部の石材間には10～10数cm大の小礫を詰めている。

**奥壁** 奥壁は大型で分厚い方形の板石2枚を上下に立てて積み重ねている。基底石にあたる下段の石材は幅88cm、高さ102cm、奥行き26cmの大きさで、掘方底面を掘り窪めることなく据えている。床面から基底石上面までの高さは東側壁のそれと等しく、西側壁の基底石上面に比べると10～

20cm程度高い。この基底石の上に幅108cm、高さ56cm、奥行き30cmの石材を横長に立てている。奥壁はこの2個の石材のみで構成されており、ほかに小型石材の積み上げはみられない。

**床面** 石室床面は標高317.60mのあたりで、玄室はほぼ水平だが、立石のあたりから石室入口にかけて羨道は緩やかに下傾している（傾斜角度3°）。床面における敷石・棺台石の存在は明確にできなかったが、玄室床面付近の埋土から鉄釘の残片（第10図13）が出土しているため、玄室内に木棺が存在した可能性はある。

#### （4）遺物の出土状況（第8図，図版4c）

遺物は、石室内（玄室・羨道）、墳丘盛土内、周溝内などから出土しているが、量的にはそれほど多くはない。

石室内出土遺物の大半は羨道からのもので、玄室内から出土した遺物は奥壁から30cmほどの床面で出土した耳環一対（15・16）と覆土下層から出土した鉄釘片（13）のみである。羨道からは、須恵器・杯（4）、平瓶（6）、台付長頸壺（7）と鉄釘片（14）が出土した。杯と鉄釘片は覆土下層、平瓶は西側壁先端付近の壁際に置かれた状態でみつかったもので、完形である。台付長頸壺は羨道中央付近の東側壁際の床面から10数cm浮いた位置で横転した状態でみつかった。

墳丘盛土からは、北東部の盛土下層から須恵器・杯身（2）、南東部の盛土から土師器・甕（10）が出土した。須恵器・大甕（8）は南西部墳裾近くの盛土から破片の大半が出土した。一部の破片は石室羨道内や墳頂付近の盛土上層から出土した。西側の周溝内から須恵器片（杯身1・3、甕5）などがややまとまって出土した。甕（5）は北西部の墳丘盛土下層や南西部の墳裾からも破片が出土している。このほか墳丘西側墳裾の近接した地点から土師器・甕（9・11）、高杯（12）が出土した。

#### （5）出土遺物（第9・10図，図版6・7）

報告遺物16点の内訳は、須恵器8点（杯・杯身・甕・平瓶・台付長頸壺・大甕）、土師器4点（甕・高杯）、鉄製品2点（鉄釘）、耳環2点である。

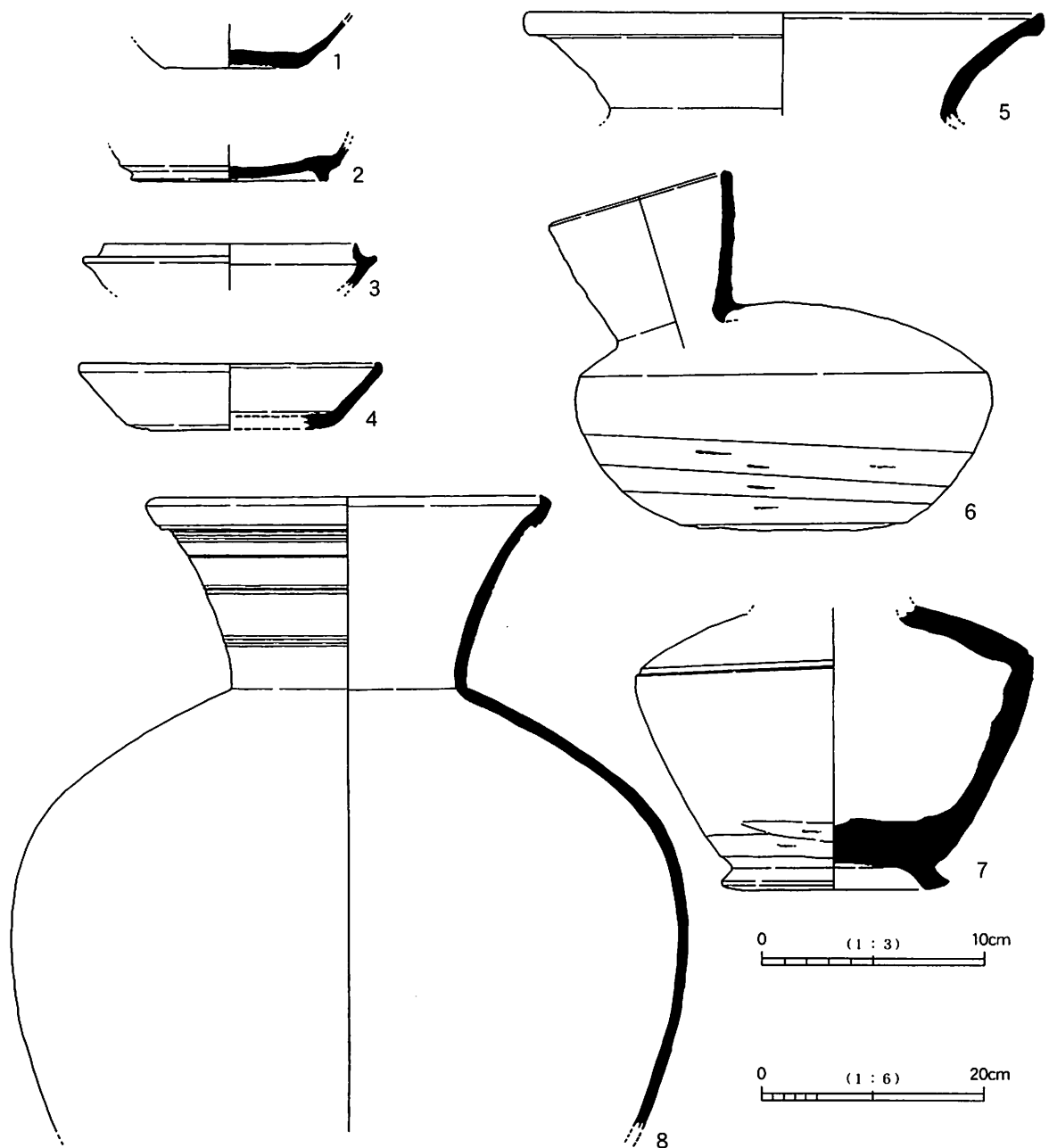
①**須恵器** 杯身3点（1～3）、杯（4）、甕（5）、平瓶（6）、台付長頸壺（7）、大甕（8）各1点の8点である。杯身（1・3）・甕（5）は周溝内、杯身（2）・大甕（8）は墳丘盛土、甕（5）は周溝内+墳丘盛土下層など、杯（4）・平瓶（6）・台付長頸壺（7）は石室羨道からそれぞれ出土した。

杯身1はやや上げ底気味の平底の底部に外上方に直線的に延びる体部が付く。口縁部は失っており、底径6cmである。底面回転ヘラ切りで、体部内外面・内底面は回転ナデを施している。杯身2は外方にハの字に踏ん張る断面逆台形の高台をもつ。口縁部・体部の大半を失った底部片で、復元高台径8.8cmである。高台は外底面のやや内側に貼り付けられている。底部ヘラ切り未調整で、内底面から高台にかけて回転ナデがみられる。杯身3は口縁部片で体部下半～底部を欠いている。復元口径11.0cmで、内湾気味に外上方に延びた体部に短い受部がつく。立ち上がり部と受部の境は明瞭に凹み、内上方に短く延びる立ち上がり部につながる。立ち上がり部は直線的に延びて、



途中で屈曲して直上する。立ち上がり部の端部は尖り気味である。調整は、内外面ともに回転ナデである。杯4は復元口径13.0cm、器高2.95cmの杯身で、平底の底部から緩やかに屈曲して外上方に開き気味に延び、端部を上方にごく僅かに摘みあげて丸く納めている。底部回転ヘラ切り、内外面回転ナデである。

5は復元口径22.7cmの甕口縁部片で、頸部からやや外湾気味に外上方に延び、端部を僅かに肥厚させている。調整は内外面ともに粗い横ナデである。色調は灰白色で、精良な胎土であるが、焼成はやや不良である。6は完形の平瓶で、肩の張る扁球状の体部上面の片寄せた位置に斜めに口頸部を付けている。底部は平底気味である。口径8.0cm、体部最大径18.4cm、器高15.8cmである。



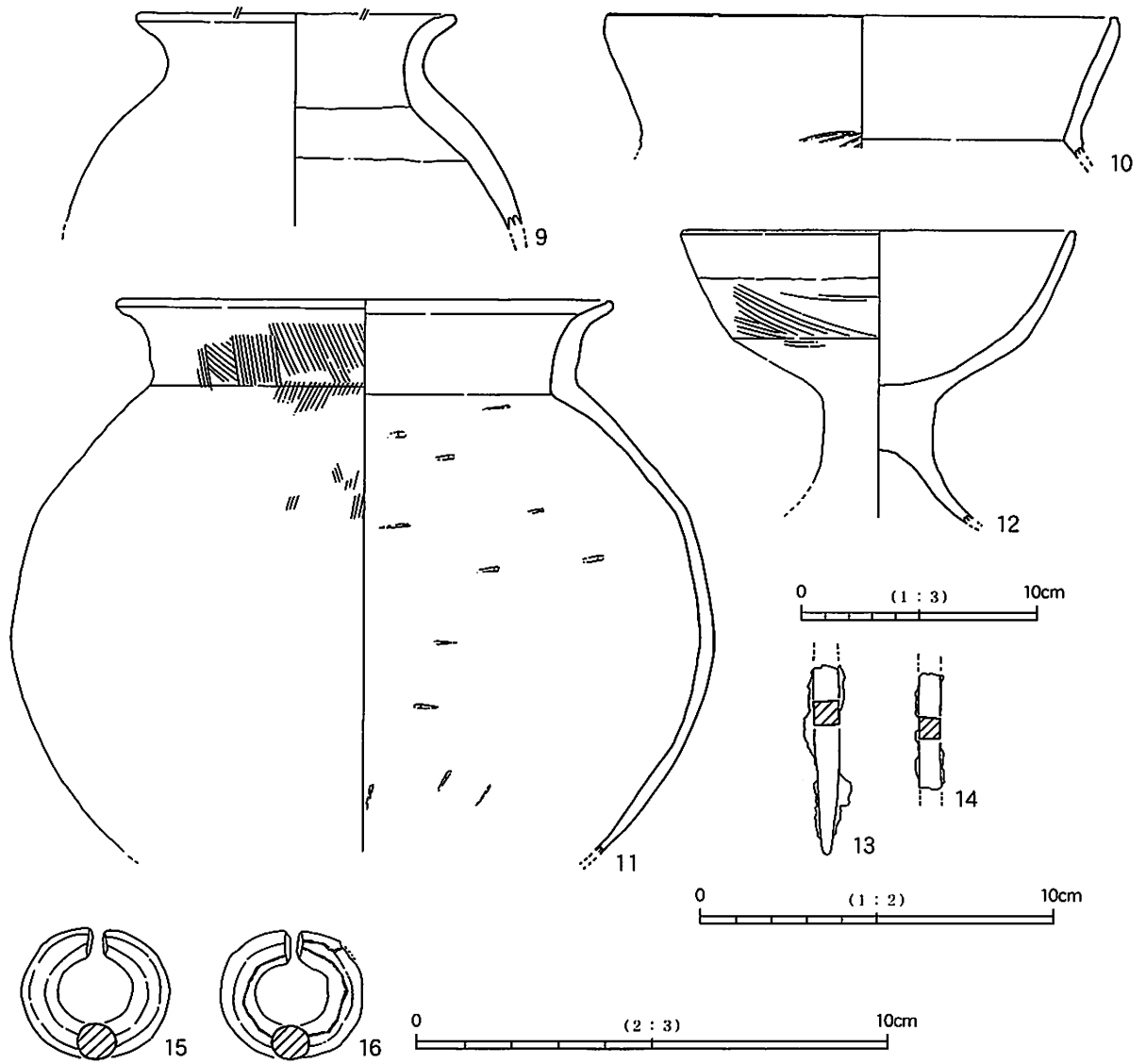
第9図 出土遺物実測図(1) (1~7:1:3, 8:1:6)

調整は、口縁～頸部内外面回転ナデ、肩部外面未調整で全体に暗緑色の自然釉が薄く付着している。体部外面上半未調整、同下半回転ヘラケズリ、外底面は粗い回転ナデを施して、平坦に粗く仕上げている。肩部～体部内面は調整不明である。7は台付長頸壺で口縁～頸部を失い、体部のみが残存する。断面方形の高台はハの字に外方に踏ん張り、器壁の厚い体部は肩が張る器形である。体部最大径17.6cm、高台径10.0cmである。調整は、体部内面が強い回転ナデ、肩部外面は丁寧なナデで薄く自然釉がかかる。最大径部から下位の上方2/3は未調整、下方1/3は回転ヘラケズリで、高台付近は回転ナデ、外底面中央は未調整である。外面の肩部には浅い1条の沈線がみられる。色調は灰黄色～淡灰色である。大甕8は丸みの強い体部から頸部にかけてやや強く窄まり、頸部から外上方に外湾気味に立ち上がる。口縁端部は内側に僅かに屈曲させ外方に幅広く帯状に肥厚させている。端面は平坦である。調整は、口縁部内面は横ナデで全面に薄く淡暗緑色の自然釉がかかる。外面は、縦方向の密な幅広のハケ目(4本/cm)を施したのち、上から1条+2条+1条・2条・2条と1～2条を単位とする横位凹線5単位(大きくは3単位)と沈線1条を4cm程度の間隔で引いている。肥厚部分の外面には櫛歯状工具による縦位の刺突文を5mm程度の間隔で押し引き状に連続して施す。体部は内面が密な同心円タタキ、外面は縦方向の平行タタキののち密な横ナデを行っている。復元口径34.0cm、復元体部最大径59.9cmである。

②土師器 甕3点(9～11)、高杯1点(12)である。9はやや強く窄まる頸部から強く外湾する口縁の端部を丸く納める。調整は、口縁～頸部内面がナデ、体部内面は横方向のヘラケズリ、外面は不明である。口径は歪みが大きく不明確であるが、復元値で13.3～15.2cm程度である。10は頸部から斜め上方に直線的に延びる甕口縁部片で、僅かに内側に曲げた口縁端部を丸く納める。調整は、内面横ナデ、外面は丁寧なナデで、頸部には横方向の刻み状のものがみられる。復元口径20.2cmである。11は復元口径20.4cm、復元体部最大径29.4cmの、丸みの強い体部をもつ甕である。頸部から開き気味に立ち上がる口縁は端部付近で外方に強く屈曲させる。調整は、口縁端部内外面が横ナデ、口縁部内面は横方向のナデののち粗い縦方向のナデつけ、体部内面は横方向主体の粗いヘラケズリ、外面は口縁部下半から体部上半にかけて縦・斜め方向のやや細かいハケ目、体部下半は調整不明である。12は復元口径16.5cmの高杯で、中実の脚部に外上方に内湾気味に延びるやや深い杯部が付く。杯部の外面中位にはごく緩やかな稜がみられる。口縁端部は丸く納める。調整は、杯部内面は斜位主体の板ナデ、内底面に一定方向のナデ、外面の口縁端部は横ナデ、その下位に斜め方向の粗いハケ目、杯部下半～脚部に丁寧なナデ、脚部内面は調整不明である。

③鉄製品 13・14は鉄釘の残片である。13は頭部を失った身部片で、断面7mm四方の方形である。14は頭部・尖端部を失った身部片で、断面6mm四方の方形である。

④耳環 15・16は銅芯金張りのほぼ同じ大きさの耳環で、外径2.7cm×3.0～3.1cm、断面径0.7×0.8～0.85cmである。鍍金はいずれも内側面にはかなり残っているが、外側面は大半が剥落し、銅芯の緑青が顕著に認められる。



第10図 出土遺物実測図(2) (9~12: 1:3, 13・14: 1:2, 15・16: 2:3)

## V ま と め

池ノ奥古墳は、世羅郡世羅町の南東部に位置する横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。ここでは、本古墳の特徴を述べたのち、広島県内の類例と比較検討し、本古墳の年代と性格について若干の考察を行いたい。

### (1) 池ノ奥古墳の特徴

**立地** 古墳は北東方向に流れる芦田川支流宇津戸川北岸の丘陵にあり、東から西に入り込む谷の最奥部の北側緩斜面に立地する(標高320m)。石室はほぼ南に開口し、谷筋に面している。周囲にはほかに古墳は見つかっておらず、平野部から隔絶されたように孤立的に存在する古墳である。

**墳丘** 径9～9.8m、高さ0.2～2.5mのほぼ円形の墳丘で、北側背後に幅0.5～2mの周溝が半円形に廻る。

**石室** 全長6.12～6.60mの無袖式の横穴式石室で、大型の石材を縦長に用いた立石により玄室と羨道を区別している。この立石は両側壁ともに突出することなく、壁面に納まっている。石室の幅は玄室・羨道ともほぼ一定で、石室内の平面形態は両側壁が並行して延びる長方形である。羨道先端には閉塞石の残欠と思われる複数の角礫が存在する。なお、石室の前面には墓道とみられる溝状遺構が延びる。

羨道の長さは2.72～3.30m、幅は0.9～1.04mである。大型でやや不整形の基底石4～5個を寝かせた上に、小型の石材を1～3段主に小口積みしている。

玄室の規模は、長さ3.40～3.48m、幅0.84～1.02m(床面積3.2㎡)である。立石のすぐ北側(奥壁側)の基底石付近から奥側に4枚の天井石がみられ、石室の高さは1.4～1.52mである。玄室幅を1とすると玄室長は3.70となり、幅の4倍近い長さをもつ玄室である。両側壁とも大型の石材6個を基底石とし、その上に3～5段小型の石材を小口積み・横積みに比較的整然と積み上げている。基底石は一部を除いて石材を縦長に立てている。最奥部2個と立石の上面が高く、奥から3～5個目の基底石上面は低くなっており、この部分に小型の石材を1～2段積んで高さを揃えている。奥から4個目の基底石のみ寝かせて据えており、その上面が最も低い。奥壁は大型の石材を立て、その上にほぼ同規模の石材を横長に立て重ねている。玄室空間は長さは一般的だが、幅・高さの数値が小さいためにきわめて狭く窮屈な感じがある。

### (2) 池ノ奥古墳の年代と性格

**石室構造の検討** 池ノ奥古墳の石室構造の特徴としては、

- ①石室の長さの割に幅や高さの数値が低く、全体に狭長な印象を与える。
- ②奥壁は大きな石材2個を横長に立てて上下に重ねている。
- ③玄室両側壁の基底石は石材を主に縦長の広口積みになっている。

④石室中央付近の両側壁に立石がみられる。この立石を境に奥壁側と入口側で基底石の据え方や基底石上の石積みの状況が大きく異なっており、立石を境に玄室と羨道の区別を行っている。などがあげられる。そのほか、宇津戸川沿いの平野部から離れて奥まった谷最奥部に古墳が造られていることや、古墳の築造や初葬に伴う遺物が極端に少ないことなども本古墳の特徴としてあげられよう。

次に、発掘調査が行われ、石室構造がある程度判明する広島県内の横穴式石室156基を主な対象に分析を行うことにしたい(第2表)。最初に、石室が狭長な点は玄室規模が池ノ奥古墳例に近い県内例(22基、玄室長2～4m)と比較すると、池ノ奥古墳の玄室幅0.84mが最小で、次いで安芸高田市・七郎谷第2号古墳<sup>(1)</sup>(6世紀後半)が幅0.86m(玄室長2.74m)、三次市・久々原第10号古墳<sup>(2)</sup>(6世紀後半、玄室長2.7m)、北広島町・登古墳<sup>(3)</sup>(6世紀後半、玄室長3m)が幅1mと玄室幅が狭い。石室の狭長度を示す玄室幅/玄室長の値は池ノ奥古墳が0.25と最も小さく、次いで七郎谷第2号古墳が0.31、登古墳、庄原市・川東大仙山第6号古墳<sup>(4)</sup>(6世紀後半、玄室長3.5m・幅1.2m)が0.34、久々原第10号古墳が0.37、東広島市・鏡東谷遺跡南地区S T01<sup>(5)</sup>(6世紀後半、玄室長3.2m・幅1.2m)が0.38である。また、石室の高さ(奥壁部)は、池ノ奥古墳の1.52mは必ずしもそれほど低い値ではない。川東大仙山第6号古墳の1.2m、三次市・大仙大平山第22号古墳<sup>(6)</sup>(玄室長2.96m)の1.24mを始め、久々原第10号古墳、三次市・塚ヶ迫第1号古墳<sup>(7)</sup>(玄室長3.2m)の1.4m、七郎谷第2号古墳の1.43m、登古墳の1.46mと玄室高が池ノ奥古墳に比べて低い古墳がいくつかみられる。玄室高/玄室長の値では、川東大仙山第6号古墳が0.34と最も低く、次いで広島市・塔の岡第1号古墳<sup>(8)</sup>(玄室長3.96m・玄室高1.7m)の0.43、塚ヶ迫第1号古墳の0.44、池ノ奥古墳の0.45となる。つまり、池ノ奥古墳の石室は玄室長・玄室高は一般的な値を示しているが、玄室幅が玄室長に対して極端に狭く、県内例のなかでも最も狭長な感じを与える石室であるといえよう。

次に、玄室における石積みの仕方の点では、まず奥壁の用石のことがある。県内の横穴式石室の大半が大型の石材1～2個を奥壁の基底石としており(145基/156基)、それも1個の石材を基底石とする場合(A類=95基・60.9%)と左右に大型の石材を2個広口積みする場合(B類=51基・32.7%)が殆どである。このほか、基底に3個以上の石材を左右に並べて広口積みする例(C類=4基)や基底にあまり大きな石材を用いず、石材を寝かせた小口積み・横積みする例(D類=2基)があるが、いずれも例数は少ない(不明=4基)。なお、ここでA類とB類を細分しておく、先ずA類はA1類=石材1個のみ、A2類=石材1個の上方隅に小礫を詰めるもの、A3類=石材2個を上下に重ねるもの、A3'類=A3類の最上段に小型の石材を1段載せるもの、A4類=基底石1個の上に小型石材を2段以上積むもの、A5類=基底石の上に1段小型石材を複数個並べるもの、A5'類=基底石の上に横長の小型石材を1個載せるもの、となる。また、B類はB1類=左右に大きな石材2個が並ぶもの、B2類=B1類の上に小型石材を2段以上積むもの、B3類=B1類の上に大きな石材1個を横長に積むもの、B3'類=B1類の上に比較的大きな石材を左右2個積むもの、となる。

池ノ奥古墳の石室の奥壁は最も例数が多いA類で、ほぼ同規模の石材2枚を上下に広口積みに積み重ねている。基底石は石材を縦長に立て、その上の石材は横長に立てている。奥壁が上下2枚の石材で構成されている県内例はそれほど多くない(11例)。これらのうち4例は上段の石材が横積みで、上下ともに石材を立てているのは、庄原市・境ヶ谷南第3号古墳<sup>(9)</sup>、三次市・<sup>たど</sup>田戸南第1号古墳<sup>(10)</sup>、安芸高田市・<sup>くいわら</sup>椋原第3号古墳<sup>(11)</sup>、北広島町・奥今田第4号古墳<sup>(12)</sup>、東広島市・藤が迫第3号古墳<sup>(13)</sup>、同・志村第7号古墳<sup>(14)</sup>、府中市・<sup>うつぼりやま</sup>打堀山B-2号古墳第1主体<sup>(15)</sup>の7基である。上段の石材が横積みになっているのは、三次市・<sup>こうびら</sup>高平第2号古墳<sup>(16)</sup>、北広島町・奥今田第1号古墳<sup>(17)</sup>、同・有岡谷第1号古墳<sup>(18)</sup>、東広島市・志村第5号古墳<sup>(19)</sup>である。また、大型の石材を上下2段載せた上に、小型の石材をひとつ積むものとしては、庄原市・境ヶ谷第1号古墳<sup>(20)</sup>、三次市・岩脇大久保第1号古墳<sup>(21)</sup>、府中市・打堀山B-2号古墳第2主体<sup>(22)</sup>、同・<sup>ひがしまきやま</sup>東槇木山第4号古墳<sup>(23)</sup>がある。岩脇大久保第1号古墳例と打堀山B-2号古墳第2主体例は基底石・2段目が広口積み、3段目は横積みあるいは小口積みであるが、あとの2者は基底石のみ広口積みで、2・3段目が横積みである。これら基底石+1(～2)個の石材を上下に基本的に立て重ねる奥壁をもつ横穴式石室墳の年代についてみると、6世紀末～7世紀初頭及び7世紀代が殆どで、6世紀後半は有岡谷第1号古墳だけであり、この奥壁において石材を上下に立て重ねるのは時期的に新しい要素といえよう。因みに、A類全体(85基)でみると、6世紀後半以前が32基(37.6%)、6世紀末～7世紀初頭が14基(16.5%)、7世紀以降が39基(45.9%)と7世紀以降が半数近い。これに対して、B類(47基)は、6世紀後半以前が31基(66.0%)、6世紀末～7世紀初頭が6基(12.8%)、7世紀以降が10基(21.3%)と6世紀後半以前が7割近い。なお、C(4基)・D類(2基)はいずれも6世紀後半以前のみと古い要素であることが分かる。これを時期別になおすと、6世紀後半以前(69基)にはA・B類(A類32基・46.4%、B類31基・44.9%)が拮抗するが、6世紀末～7世紀初頭(20基)はA類14基(70.0%)・B類6基(30%)、7世紀以降(49例)はA類39基(80.0%)、B類10基(20.0%)とA類が7～8割と多数を占めるようになる。これは7世紀以降における石室の小型化の趨勢と関わりがあるろう。

次に、石室、特に玄室の側壁における基底石の石材の用い方に着目したい。玄室の側壁には一般的には数個程度の基底石が据えられている。池ノ奥古墳では両側壁とも6個ずつで、西側壁が奥から①縦長・広口積み、②縦長・広口積み、③縦長・広口積み、④小口積み、⑤横長・広口積み、⑥縦長・広口積み(立石)、東側壁が奥から①縦長・広口積み、②縦長・広口積み、③縦長・広口積み、④横積み、⑤縦長・広口積み、⑥縦長・広口積み(立石)となる。計12個の基底石のうち、9個が石材を縦長に広口積みし、残りは横長に広口積みするもの、横積み、小口積みが各1個となる。奥壁から1～3個目と玄室先端の基底石は両側壁ともすべて縦長・広口積みで、これらに挟まれた奥から4・5個目の基底石を石材を寝かせる横積み・小口積みや横長に広口積みしている。このように本古墳は、側壁の基底石を縦長・広口積みを主体に据えているが、県内例ではそれほど多くない。県内例の大半は横長・広口積み主体(100基・66.0%)で、縦長・広口積み主体の石室は6基にすぎない。このほか、横長と縦長の広口積みが同程度のもの(10基)やこ

れに横積み・小口積みなどが混ざってくるもの(19基)、さらには横積み・小口積みが主体的なもの(15基)などがみられる。縦長・広口積み主体の古墳は、世羅町・亀ノ尾第1号古墳(奥壁A2類)、海田町・畝観音免第1号古墳(A2類)、久々原第10号古墳(B2類)、大仙大平山第22号古墳(B類)、広島市・倉重古墳(B類)で、奥壁の壁面構成がA3類であるのは池ノ奥古墳以外にはない。これらの古墳については、年代的には、久々原第10号古墳が6世紀後半、大仙大平山第22号古墳が6世紀後半～7世紀初頭、亀ノ尾第1号古墳が6世紀末～7世紀中頃、倉重古墳が7世紀前半、畝観音免第1号古墳が7世紀前半～中頃で、これらのことから側壁基底石における縦長・広口積み主体は7世紀代にやや重心のある時期的に新しい要素とみることができる。しかし、横長・広口積みをはじめ、横積みや小口積みなどと混合した使用状況の場合は必ずしも縦長・広口積みは時期的に新しい様相を示してはいない。また、奥壁のA類、特にA3類との関連性はそれほど強いとはいえない。つまり、奥壁のA類と側壁基底石における縦長・広口積みの主体的使用はそれぞれには石室構築要素のなかでも年代的に新しい要素といえるが、両者が合わさった形では、広島県内では池ノ奥古墳が現状では唯一のものであり、時期的に新しい様相を示しているのか否かは速断はできない。

最後に、側壁中央に嵌め込まれた立石のことがある。池ノ奥古墳の側壁は上述したように、側壁の基底石は石材を縦長に用いているために、玄室と羨道の境としての立石はあまり目立たない。石室の内側への突出もみられない。ただ、この立石を境に側壁の基底石の据え方や基底石上の石積みの状況が大きく変化しており、この立石を境界として奥壁側を玄室、石室入口側を羨道としたと考えられる。つまり、この立石を境に奥壁側は基底石を整然と縦長・広口積み主体に据えているのに対して、石室入口側は石材を寝かせた横積み・小口積み主体に比較的乱雑に置かれている。また、基底石上の石積みについては、立石を境に奥壁側は形の整った石材を4～5段比較的整然と横積み・小口積みしているが、石室入口側は1～3段の不整形の石材を乱雑に積み上げている。立石は整美な石材を整然と積み上げた玄室と不揃いな石材を乱雑に積んだ羨道との境界として存在しており、池ノ奥古墳を構築した集団に羨道と玄室の区別が充分認識されていたことが分かる一方で、その認識が充分存在する時期に本古墳が築造されたことを示していよう。

ところで、県内の無袖の横穴式石室で立石が認められるのは20基で、両側壁にあるものは8基(いずれも突出するもの3基、片方の側壁のみ突出するもの3基、いずれも突出しないもの2基)、片方の側壁のみに存在するもの12基(突出するもの8基、突出しないもの3基)である。池ノ奥古墳のように両側壁に突出しない立石を持つ例は久々原第10号古墳1基のみである。片方の側壁に突出する立石が存在する例が最も多い。

以上のように、石室構造の検討では、本古墳の奥壁の壁面構成、玄室側壁の基底石の石材の用い方などに7世紀代という時期的に新しい要素がみられることが分かった。

**出土遺物の検討と古墳の年代** 本古墳からの出土遺物は少ない。特に、玄室内からの遺物は耳環1対のみで、羨道からは須恵器(平瓶・台付長頸壺・杯)などが出土しているが、9世紀前半に下る杯4は後世の混入で、床面から浮いた状態で出土した長頸壺7はTK48型式併行期のもので、

追葬に伴うと思われる。平瓶6は羨道先端の床面から出土したが、肩が張り平底気味であることなど形態的に比較的新しい特徴がみられることから、TK46～TK48型式併行期のもので、これも追葬時に置かれた可能性が高い。つまり、石室内出土遺物のうち、耳環・鉄釘以外は後世の混入か追葬時のものと考えられる。

次に、墳丘・周溝出土の遺物をみると、須恵器（杯身・甕・大甕）や土師器（甕・高杯）がある。須恵器・杯身は高台をもつ2が8世紀代で後世の混入と思われる。3は口径11.0cmとかなり小型化しており、TK209～TK217型式併行期（7世紀初頭～前半）頃と考えられる。石室開口部西側の南西部墳裾付近で集中的に出土した大甕は肥厚して断面長方形の口縁端部の特徴などから、7世紀初頭頃とみられる。この大甕は本来石室開口部の西側に据え置かれていたと考えられることから、古墳の築造や初葬に伴うとみられる。

なお、墳丘西側の墳裾付近から比較的集中して土師器・甕や高杯が出土した。甕9は6世紀後半だが、ほぼ同じ個所から出土した甕11と高杯12については、甕11が庄原市・境ヶ谷遺跡SX61に、高杯12は同・大成遺跡SX08に類例がみられることから、6世紀前半～中頃を中心とした時期のものとみられる。これらの土師器は本古墳の築造より遡る時期のものであり、直接古墳に伴うものではない。

以上の石室構造の分析や出土遺物の検討から、池ノ奥古墳は7世紀初頭～前半頃に築造・初葬が行われ、その後7世紀中頃～後半頃に追葬が行われたと考えられる。また、本古墳の被葬者やその出自集団については明確ではないが、宇津戸川沿いの狭小な平野部を生産基盤とし、また中世大田荘とその倉敷地尾道とを結ぶ南北の往還と古代山陽道のルートとする説もある東西の街道の交差する交通の要衝を抑えていた集団とも考えることもできよう。

#### 註

- (1) 土師埋蔵文化財発掘調査団「七郎谷第2号古墳」『土師 土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告 1969年度』1970年
- (2) 広島県教育委員会「久々原第10号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 1979年
- (3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「登古墳」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1991年
- (4) 東城町教育委員会「川東大仙山第6号古墳」『川東大仙山古墳群』1994年
- (5) 広島大学統合移転地理蔵文化財調査委員会「鏡東谷遺跡の調査」『広島大学統合移転地理蔵文化財発掘調査年報』Ⅱ 1983年  
広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室「鏡東谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ 2003年
- (6) 三次市教育委員会「大仙大平山第22号古墳」『大仙大平山第21・22号古墳』2000年
- (7) 甲奴町教育委員会『塚ヶ迫第1号古墳発掘調査報告書』1983年
- (8) 財団法人広島市文化財団『塔の岡古墳群』1999年
- (9) 広島県教育委員会（財）広島県埋蔵文化財調査センター「境ヶ谷南古墳群」『境ヶ谷遺跡群』1983年



- (10) 三良坂町教育委員会「田戸南第1号古墳」『灰塚ダム水没地区遺跡群』 2004年
- (11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「柘原第3号古墳」『柘原第2・3号古墳発掘調査報告書』 2001年
- (12) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「奥今田第4号古墳」『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(I) 1997年
- (13) 広島県教育委員会「広島県賀茂郡八本松町藤が迫遺跡群発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第9集 1971年
- (14) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「志村遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅳ) 1992年
- (15) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「打堀山遺跡群B地点」『打堀山遺跡群A・B地点』 1997年
- (16) 広島県教育委員会「広島県三次市高平遺跡群発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第9集 1971年
- (17) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「奥今田第1号古墳」『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(I) 1997年
- (18) 広島県教育委員会「有岡谷1号古墳」『城が谷遺跡群発掘調査報告』 1973年
- (19) 註(14)に同じ。
- (20) 広島県教育委員会 (財)広島県埋蔵文化財調査センター「境ヶ谷第1号古墳」『境ヶ谷遺跡群』 1983年
- (21) 三次市教育委員会「岩脇大久保第1号古墳」『岩脇大久保第1号古墳・岩脇大久保遺跡』 1991年
- (22) 註(15)に同じ。
- (23) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「東楨木山第1・4号古墳」『門田A遺跡 東楨木山第1・4号古墳』 1999年
- (24) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『亀ノ尾第1号古墳発掘調査報告書』 2000年
- (25) 広島県安芸郡海田町教育委員会「畝観音免第1号古墳」『畝観音免古墳群』 1979年
- (26) 広島県教育委員会「倉重古墳」『広島県文化財調査報告』第14集 1983年
- (27) 広島県教育委員会 (財)広島県埋蔵文化財調査センター「境ヶ谷遺跡」『境ヶ谷遺跡群』 1983年
- (28) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『大成遺跡』 1989年

第2表 発掘調査された広島県内の主要な横穴式石室（単位m）

No.	文献	市町名	大字	古墳名	立地	石室全長	玄室長	玄室幅	玄室高	奥壁	側壁基底石	立石*	時期	備考
1	1	世羅町	宇津戸	池ノ奥	谷奥丘陵裾	6.12～6.6	3.40～3.48	0.84	1.52	A3	縦・広口	○	6末～7初	
2	2	世羅町	宇津戸	大戸山1	谷側丘陵裾	4.5～4.8		1	1.4	A2	横・広口（一部縦）	×	6末～7前半	
3	3	世羅町	伊尾	龍王山9	谷奥丘陵裾	5.5+		1.15	1.45	A2	横・広口	×	6末～7	
4	4	世羅町	伊尾	龍王山10	谷奥丘陵裾	3.4+		0.78		A2	横・広口	?	6末～7前	
5	5	世羅町	寺町	康徳寺	丘陵端頂部	8.3+	5.9	2.1	3.2	A1	横・広口	●	6末～7	柵石
6	6	世羅町	徳市	風呂之元	丘陵斜面	5.3		1.01		A	横・広口		6後～7初	
7	7	世羅町	徳市	八反田	谷奥丘陵斜面	5.3		1.6		B2	横・広口（一部縦）	×	6末～7初	
8	8	世羅町	賀茂	亀ノ尾1	丘陵裾	8		1.5	1.8	A2	縦・広口（上1段）	×	6末～7中	
9	9	世羅町	津口	湯船6	丘陵斜面	7.2	4.7	1.2		B3	横・広口	×	6後～7初	敷石
10	10	世羅町	西神崎	近成山1	丘陵斜面	6.5+		2.4	1.5	A5	横～縦・広口	△?	7後半	家形石棺?
11	11	府中市	上下町	南山1	丘陵上					B2	横・広口	▲	7初	前方後円墳
12	12	府中市	鶴飼町	打堀山B-2・第1	丘陵斜面	1.8～1.9		0.7	0.7	A3	横・広口（一部縦）		7中～後	1墳丘2石室
13	12	府中市	鶴飼町	打堀山B-2・第2	丘陵斜面	2～2.1+		0.4		A3	横・広口			
14	12	府中市	鶴飼町	打堀山B-3	丘陵斜面	0.75～1.6+		0.6		B2	横・広口			
15	13	府中市	鶴飼町	東模木山4	丘陵斜面	1.92～2.01+		0.96	0.94	A3	横積み（一部横・広口）		7後～8	
16	14	府中市	三郎丸町	矢谷4	丘陵裾斜面	3.6+		0.6	1.3	A1	横・広口（一部縦）	×	6後半～7前半	
17	15	福山市	新市町	後池2	丘陵裾	2～2.8+		1.2	1.8	A5	横・広口		6後～末	
18	16	福山市	新市町	後池17	丘陵裾	2.76～3.16+		1.42	1.43	A2	横・広口		6後半～7初	
19	17	福山市	駄家町	飛渡	丘陵裾斜面	1.48～3.83+		1.33	1.98	A1	横・広口		7前半	排水溝
20	18	福山市	駄家町	狼塚3	丘陵尾根線上	3.93～4.17		1.57	1.65	B2	横・広口（一部縦）、横積み		6後半	
21	19	福山市	駄家町	狼塚4	丘陵尾根線上	1.26～1.29+		1.1	1.02	A1	横・広口		7後半	
22	20	福山市	駄家町	狼塚5	丘陵尾根端部斜面	1.16～1.26+		1.47		B	横・広口		6後半	
23	21	福山市	芦田町	田上1	谷奥丘陵端部	3.3+	2.35	1.2		A	横・広口	▲	6中～7前半	
24	22	福山市	芦田町	田上2	谷奥丘陵端部	6.35	3.15	1.8		B2	横・広口		6中～7前半	片袖
25	23	福山市	春日町	大蔭1	丘陵頂部	5.5		0.95		A2	横・広口（一部縦）		6後～7初	
26	24	福山市	春日町	銭神	丘陵	8.3		1.8	1.9	A2	横・広口		6後～7初	
27	25	福山市	今津町	高岩1	丘陵斜面	5.4～6.6		1.5	2.4	A5	横・広口		6後	
28	26	福山市	東村町	鳥越1	丘陵尾根線	5.1～5.3		1.4		B3	横・広口（一部横積み）		6後～末	
29	27	福山市	引野町	大谷	丘陵斜面	4.2～4.6+		1.3	1.68	A1	横～縦・広口	×	6末～7初	
30	28	福山市	水呑町	新立	丘陵斜面	5.95+	4.45～4.47	1.6		B2	横積み		6後半～7初	片袖・仕切石
31	29	福山市	津之郷町	坂部3	丘陵尾根線上	5.7～5.9+		1.65	2.4	A5	縦～横・広口	▲（●?）	6後半	
32	30	福山市	津之郷町	坂部6	谷奥丘陵斜面	4.5+		1.4		A	横・広口		6後半～末	
33	31	福山市	津之郷町	沢田1	丘陵斜面	1.85～2.8		0.85		A	横・広口		7末	陶棺
34	32	福山市	津之郷町	沢田2	丘陵斜面	3.8～4.1		0.9	0.96	A1	横・広口		7後半	
35	33	福山市	神辺町	永谷1	丘陵斜面	5.87		1.29		A	横・広口		6末～7中葉	敷石
36	34	福山市	神辺町	丁谷1	丘陵斜面	2.3+		0.8		A	横・広口		6末～7中葉	
37	35	福山市	神辺町	迫山1	丘陵斜面	11.55～11.65		2.5	3	A4orA5	横～縦・広口		6後半	片袖
38	36	尾道市	美ノ郷町	大想田山1	丘陵尾根線上	2.25		0.85	0.9	A1	横積み?	×	6後半	敷石
39	37	尾道市	美ノ郷町	大想田山2	丘陵尾根線上	3+		1.5		A	横積み		6後半	
40	38	三次市	三良坂町	皇渡	丘陵斜面	2.8+		1.6		B	横・広口		6後半	敷石・土器床
41	39	三次市	三良坂町	植松2	丘陵尾根上	2.9+		1.8		C	横・広口		6後半～7初	礎床・土器床
42	40	三次市	三良坂町	植松3	丘陵尾根上	5.8～6.0	3.3～3.5	1.4		B	横・広口	×	6中葉～7初	礎床・土器床
43	41	三次市	三良坂町	見尾山1	丘陵斜面	10.2	6.7	1.85	2.05	A5	横・広口	◎	6末～7初	敷石・区画
44	41	三次市	三良坂町	見尾山2	丘陵斜面	7.7		1.3		A2	横・広口	×	6末～7初	礎床

No.	文献	市町名	大字	古墳名	立地	石室全長	玄室長	玄室幅	玄室高	奥壁	側壁基底石	立石*	時期	備考
45	41	三次市	三良坂町	見尾山3	丘陵斜面	6		1.2	1.56	B	横・広口(一部縦)	×	6末~7初	敷石
46	41	三次市	三良坂町	見尾山4	丘陵斜面	1.7		0.5		B	横・広口(一部小口積?)	×	6末~7初	土器床
47	42	三次市	三良坂町	田戸	丘陵裾	3.5+		2	1.92	A1	横~縦・広口		6後半~7初	排水溝
48	43	三次市	三良坂町	田戸北1	丘陵斜面	3.05+		1.55		B	横・広口		6後半~7前半	
49	44	三次市	三良坂町	田戸北2	丘陵斜面	(1~4.4+)					横・広口		7前半	敷石
50	45	三次市	三良坂町	田戸南1	丘陵斜面	8.07		1.88	2.22	A3	横・広口	×	6後半~7初	敷石・仕切石
51	46	三次市	三良坂町	田戸南2	丘陵斜面	6.5		1.6	1.74	B3	横・広口(一部縦)	×	6後半~7初	敷石
52	47	三次市	三良坂町	田戸南3	丘陵斜面	6.4+		1.08		B2	縦~横・広口	×	6後半~7初	土器床
53	48	三次市	三若町	陣床山5	丘陵頂部	7~7.2		1.25		B	横・広口?	×	6後半	敷石
54	49	三次市	三若町	寺側	丘陵緩斜面	5.2~6.6+		1.9		B	横・広口	×	6後半~7前半	敷石・区画
55	50	三次市	栗屋町	岩脇大久保1	丘陵尾根線	7.2		1	1.76	A3	横・広口	×	6末~7初	
56	51	三次市	向江田町	大仙大平山22	丘陵端部	5.35~5.7	2.18~2.96	1.6	1.24	B	縦・広口(一部横)		6後半~7初	片袖
57	52	三次市	上日市町	高平1	丘陵斜面	3.65+		0.73	1.2	A1	横・広口		6後半~7前半	
58	52	三次市	上日市町	高平2	丘陵斜面	2.8+		0.75		A3	横・広口		7中葉	
59	53	三次市	西酒屋町	久々原10	丘陵斜面	3.3	2.7	1	1.4	B2	縦・広口	○	6後半	
60	54	三次市	甲奴町	塚ヶ追1	丘陵端部頂部	4.7	3.2	1.5	1.4	B2	横・広口		6後半	片袖・敷石
61	55	庄原市	本村町	国重1	丘陵斜面	3.25+		0.9		A5	横・広口	×	8前半~中頃	
62	56	庄原市	本村町	大原4	丘陵斜面	2.3~2.9+		0.8		A2	横・広口		7後半~8初	
63	57	庄原市	本村町	月貞寺32	丘陵斜面	6.35	4.85	1.28		A2			6後半	
64	58	庄原市	高町	篠津原3	丘陵斜面	3.1		1.19	1.2	B3	横~縦・広口		7後半~8初	切石積
65	59	庄原市	川西町	境ヶ谷1	丘陵斜面	7		1.15	1.5	A3	横・広口(一部縦?)	×	7中頃	
66	60	庄原市	川西町	境ヶ谷南3	丘陵斜面	5.7		1.2	1.3	A3	横積み?	×	7中頃	
67	61	庄原市	川西町	唐櫃	丘陵尾根上	13.1	7.2	2.1	2.6	A4	縦~横・広口(一部横積み)	▲	6後半	前方後円墳
68	62	庄原市	川北町	下重行1	河岸段丘	3.9+		1	1.59	A4	横・広口(一部縦)		6後半	
69	63	庄原市	東城町	貞末谷2	丘陵斜面	2.38~2.93+		1.2		A	横・広口		6後半~7初	
70	64	庄原市	東城町	未渡大仙山5	丘陵端部頂部	4.4~5.3		1.6	1.62	B2	横・広口(一部縦)	×	6後半~7初	
71	65	庄原市	東城町	槻平塚2	谷奥丘陵斜面	5.78~5.92	3.06~3.27	1.34	1.76	B2	横・広口, 横積み(一部縦・広口)	●	6末~7初	敷石
72	66	庄原市	東城町	鶴亀山1	丘陵端部尾根線	2.8+		1.4	1.1	B2	横・広口		6後半	河原石使用
73	67	庄原市	東城町	川東大仙山6	尾根線上	6	3.5	1.2	1.2	B2	横~縦・広口	●	6後半	
74	68	庄原市	東城町	槻ヶ峠2	丘陵裾斜面	5.2+	3.13	1.74		B2	横・広口	△	6後半	敷石
75	69	庄原市	東城町	犬塚1	丘陵頂部	3.5~3.7	2.3	1.9		D	横・広口(西), 横積み(東)		6中葉	敷石
76	70	庄原市	東城町	井手山	丘陵斜面	3.3~3.4		0.8	1.1	A1	横~縦・広口, 横積み	×	7前半~中頃	
77	71	庄原市	東城町	鬼橋野路	尾根頂部	7		0.8	1.2	B2	横・広口(一部縦)	×	6末~7	
78	72	庄原市	東城町	雨連	丘陵斜面	5.1+		1.73	2	A1	横・広口		6末~7	
79	73	庄原市	口和町	金田2	丘陵斜面	5.32~5.45		1.08	1.38	B2	横・広口	△	6末~7	
80	74	庄原市	口和町	池津1	丘陵斜面	8.65	4.9	1.44	1.76	A2	横・広口	▲	6後半	
81	75	庄原市	総領町	宮本	丘陵裾	5.4~6.3+		1.3		A5	横・広口(一部横積み?)		7前半	
82	76	神石高原町	永野	高塚山2	丘陵斜面	6.4~6.6		1.4	1.8	B2	横・広口	△?	6後半	
83	77	三原市	大和町	虫送り1	丘陵裾緩斜面	6.95~7.05		1.52	1.76	A1	横・広口, 小口(一部横積み)		6後半	敷石
84	78	三原市	本郷町	みたち3	尾根頂部	4.8~5.2	3.1	1.4		C	広口, 横積み		6後半	片袖
85	79	三原市	本郷町	陣開2	尾根線上	2.5+		1	1	B2	横・広口(一部縦, 横積み)	×	7	
86	80	三原市	本郷町	陣開3	丘陵裾	2.8~3.3+		1.4	1.4	A4	横・広口		6後半	
87	81	三原市	本郷町	天高1	丘陵頂部	3.7+		0.95		A2orA4・5	横・広口		7前半	
88	82	三原市	本郷町	金壳1	丘陵斜面	2.8~2.9+		0.8	1.2	A4	横・広口(一部小口・横積み)		7	
89	82	三原市	本郷町	金壳2	丘陵斜面	3.1~3.6+		1	1	A4	横・広口(一部横積み)		7	
90	83	三原市	沼田西町	銭神1	尾根線上	3.9+		1		B2	横積み(一部小口積み)		7	

No	文献	市町名	大字	古墳名	立地	石室全長	玄室長	玄室幅	玄室高	奥壁	側壁基底石	立石*	時期	備考
91	84	三原市	沼田西町	銭神 2	丘陵斜面	3.8 +		1.12		B2	横・広口 (一部小口・横積み)		7	
92	85	三原市	沼田西町	銭神 3	丘陵斜面	4.8 +		1.1		B3	横・広口 (一部縦)		7前半~中頃	
93	84	三原市	沼田西町	銭神 4	丘陵斜面	3.09 +		0.85		A1	横・広口, 小口・横積み		7~8?	
94	84	三原市	沼田西町	銭神 5	尾根線上	4.36		1.3		B2	横・広口		6後半	
95	86	東広島市	黒瀬町	宗近柳国 2	丘陵斜面	3.55				A	横・広口 (一部横積み?)		6後半	袖あり・礎床
96	87	東広島市	黒瀬町	岩森山	丘陵斜面	4 +		1.75		C	横・広口, 横積み?	×	6後半	礎床
97	88	東広島市	河内町	二反田 1	丘陵裾斜面	8	5	1.8	2.24	A4	横・広口 (一部横積み?)	▲	6後半	
98	89	東広島市	福富町	福富中学校裏	丘陵斜面	6.6~7.5 +		1.6	1.9	B2	横・広口 (一部小口積み)	×	6後半~7初	
99	90	東広島市	福富町	丁田南 3	丘陵頂部斜面	3.7~4		0.95		B?	横・広口 (一部縦, 小口積み)		7前半	
100	91	東広島市	豊栄町	宮ヶ迫	丘陵裾	9		2	2	B2	横・広口	×	6中葉	
101	92	東広島市	豊栄町	光福寺	丘陵裾	5.5 +		1.65	1.8	B2	横積み?		6中葉	
102	93	東広島市	八本松町	藤が迫 3	丘陵斜面	3.9 +		1.07	1.35	A3	横・広口 (一部縦)		6末~7前半	
103	94	東広島市	西条町	大横 2	丘陵尾根上	7.5	3.9	1.7			横・広口 (一部横積み)	▲	6後半	
104	95	東広島市	西条町	奥田大池	丘陵頂部	5.46 +		1.05		B	横・広口 (一部縦), 横積み	×	6後半~7前半	
105	96	東広島市	西条町	助平	丘陵端部頂部	3.3~3.5		1.4		D	横積み, 小口積み (一部横・広口)	×	6中葉~後半	竪穴系横口式
106	97	東広島市	西条町	鏡東谷・南地区 ST01	丘陵斜面	4.8 +	3.2	1.2		B2	横積み, 小口積み (一部横・広口)	×	6後半	敷石
107	98	東広島市	高屋町	連道 2	丘陵斜面	2.55 +		0.8		A4	横積み		7前半	
108	99	東広島市	高屋町	原田岡山 1	丘陵斜面	6.5~6.85	4.5	1.8	2.4	B2	横・広口 (一部縦)	◎	6後半	
109	99	東広島市	高屋町	原田岡山 2	丘陵斜面	6.1~6.8		1.75	1.8	A2・A5	横積み, 横・広口	×	6末~7前半	
110	100	東広島市	高屋町	志村 1	丘陵斜面	2.6~3.8 +		0.85			横積み, 横・広口	×		
111	100	東広島市	高屋町	志村 2	丘陵裾	3.1~3.3 +		1.27	1.71	A1	横・広口, 横積み, 小口積み	×		
112	100	東広島市	高屋町	志村 3	丘陵斜面	3.2~3.3 +		0.72	1.14	A5 or A2	横・広口, 横積み	×		
113	100	東広島市	高屋町	志村 4	丘陵斜面	2 +		1	1.32	A2	横・広口			
114	100	東広島市	高屋町	志村 5	丘陵斜面	4.1~4.5 +		1.35	1.35	A3	横・広口 (一部横積み)	×		
115	100	東広島市	高屋町	志村 6	丘陵斜面	2.9~3.6 +		0.98	1.14	A5	縦~横・広口, 横積み	×		
116	100	東広島市	高屋町	志村 7	丘陵斜面	2.9~3.1 +		0.92	1.14	A	横・広口, 横積み, 小口積み	×		
117	100	東広島市	高屋町	志村 8	丘陵斜面	1.8~2.4 +		0.47		A3	横・広口 (一部横積み)	×		
118	101	東広島市	高屋町	志村西 1	丘陵斜面	3.45 +		0.73		A	横・広口	×	7中葉	
119	101	東広島市	高屋町	志村西 2	丘陵斜面	1.15		0.43		A1	横・広口	×	8	
120	102	東広島市	高屋町	胡麻 4	丘陵尾根頂部	3.15~3.27		0.7	1	A5	横・広口 (一部縦)	×	7末~8初	
121	103	東広島市	志和町	塚土 2	丘陵斜面	5.15 +		1.65	1.7	B2	横~縦・広口 (一部横積みか)	×	6後半	
122	104	東広島市	志和町	塚土 5	丘陵斜面	3.3 +		0.8	1.1	A1	横・広口, 横積み		7中~後半	
123	105	東広島市	志和町	蛇追山	谷頭部丘陵斜面	2.3 +		1.3		B	横・広口		6後半	
124	106	北広島町	今田	奥今田 1	丘陵斜面	4.9		0.55		A3	横・広口 (一部横積みか)	×	6末~7初	
125	107	北広島町	今田	奥今田 2	丘陵斜面	5.3~6		1.2		B2	横・広口 (一部小口・横積み)	×	6後半~7初	
126	108	北広島町	今田	奥今田 3	丘陵斜面	3.7	2.3~2.5	1.7		C	横積み, 横~縦・広口	×	6中葉	片袖・敷石
127	109	北広島町	今田	奥今田 4	丘陵斜面	3.7		0.7		A3	横・広口 (一部縦)	×	6末~7初	
128	110	北広島町	今田	奥今田 5	丘陵斜面	2.2~2.5		0.4		A	横・広口 (一部縦)	×	6末~7初	敷石
129	111	北広島町	本地	立石 1	丘陵緩斜面	5.2~5.4		0.8	1.2	B2	横・広口 (一部縦)	×	6末~7前半	
130	112	北広島町	本地	立石 2	丘陵緩斜面	5.5~6		1.1	1.5	B2	横~縦・広口	×	6末~7初	
131	113	北広島町	南方	石塚 1	丘陵斜面	7.2		1.05	1.5	A5	横・広口	×	6末~7初	
132	114	北広島町	南方	石塚 2	丘陵斜面	4.5		0.85	1.4	A4	横・広口	×	6末~7初	
133	115	北広島町	有田	有岡谷 1	微高地	4.2~4.4		0.9		A3	横・広口?	×	6後半	敷石?
134	116	北広島町	大塚	登	丘陵裾	4.7~4.8 +	2.9~3	1	1.46	A1	横・広口 (一部縦)	×	6後半	
135	117	北広島町	大朝	東山	丘陵尾根頂部	4.56~4.9 +		1.52	1.89	A4	横・広口		6後半	
136	118	北広島町	大朝	龍岩 1	丘陵斜面	8.35		0.95	1.44	A1	横積み, 横・広口	×	6末	

No.	文献	市町名	大字	古墳名	立地	石室全長	玄室長	玄室幅	玄室高	奥壁	側壁基底石	立石*	時期	備考
137	119	廿日市市	吉和	田中原 4	丘陵斜面	4.85 ~ 4.95	2.45	1.65		A1	横・広口 (一部横積み)	×	6後半	片袖・敷石
138	120	広島市	五日市町	倉重	丘陵頂部	3.99 +		1.34		B	縦・広口 (一部横積み?)		7前半	敷石
139	121	広島市	白木町	塔の岡 1	丘陵尾根上	7.61 ~ 7.64 +	3.94 ~ 3.96	1.68	1.7	B2	横積み, 縦~横・広口		6中葉~後葉	片袖・土器床
140	121	広島市	白木町	塔の岡 6	丘陵尾根上	8.2 ~ 8.86		1.43	1.73	A5	横・広口, 横積み?	△ 2	6末~7初	
141	122	海田町	畝	畝観音免 1	丘陵裾	8.1 +	5.8	1.87	2.3	A2	縦・広口 (一部横)	◎	7前半~中頃	
142	123	海田町	畝	畝観音免 2	丘陵斜面	2.3 +		2	2.3	A5	横・広口		7前半~中頃	敷石
143	124	安芸高田市	美土里町	塩瀬神社裏	丘陵頂部	6	3.2	1.75		A	横・広口	×	6後半	敷石
144	125	安芸高田市	八千代町	新宮 5	丘陵斜面	7.5	3.15	1.15	1.8	A2	横・広口 (東), 横積み (西)	▲	7前半	敷石・方墳
145	126	安芸高田市	八千代町	鳥越	丘陵端部	6.25		0.99	1.7	A1	横・広口		6後半	敷石
146	127	安芸高田市	八千代町	権現 1	丘陵端部斜面	6.55 ~ 7.8	4.6	1.5	1.8	A2	横積み		6後半	片袖・敷石
147	128	安芸高田市	八千代町	桑の木	河岸段丘	4.06 ~ 5.56 +		1.32		B	横・広口		6後半	
148	129	安芸高田市	八千代町	七郎谷 1	丘陵裾斜面	1.7 +		0.7	1.1	A4	横・広口		6後半	敷石
149	130	安芸高田市	八千代町	七郎谷 2	丘陵斜面	4.79 +	2.74	0.86	1.43	B	横積み		6後半	敷石
150	131	安芸高田市	八千代町	七郎谷 3	丘陵斜面	5.5		0.98	1.55	A4	横積み	×	6後半	敷石
151	132	安芸高田市	吉田町	新開 2	丘陵斜面	4.4 +		1.5		A4orA5	横・広口		6末~7初	
152	133	安芸高田市	八千代町	大迫	丘陵裾	5.56 +		1.58	1.54	A1	横積み	×	6後半	敷石・彩色
153	134	安芸高田市	高宮町	粒原 2	丘陵斜面	6.7		1.5	1.8	A4	横・広口		6後半~7前半	敷石・土器床
154	135	安芸高田市	高宮町	粒原 3	丘陵斜面	5.9		1.2	1.6	A3	横・広口	×	6末~7初	区画・敷石
155	136	安芸高田市	甲田町	法恩寺南	丘陵緩斜面	7.1	4.1	1.9		B2	横・広口 (一部横積み)	▲ (◎?)	6後半	土器床
156	137	安芸高田市	吉田町	烏ケ尾 1	丘陵裾	3.33		0.64	0.85	A4	横・広口 (一部縦, 横積み)	◎?	7前半	

\* 立石=◎: 両側壁に突出する立石あり, ●: 両側壁に立石があり, 片方は突出するが, もう一方は突出しない, ○: 両側壁に突出しない立石あり, ▲: 片方の側壁に突出する立石あり, △: 片方の側壁に突出しない立石あり, ×: 両側壁に立石なし

## 文献

- 1 財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 2007年
- 2 世羅町教育委員会『大戸山第1号古墳』 2006年
- 3 龍王山古墳群発掘調査団「第9号古墳」『龍王山古墳群 第9号古墳・第10号古墳の発掘調査報告』 1971年
- 4 龍王山古墳群発掘調査団「第10号古墳」『龍王山古墳群 第9号古墳・第10号古墳の発掘調査報告』 1971年
- 5 世羅町教育委員会『康徳寺古墳』 1997年
- 6 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『風呂之元古墳発掘調査報告書』 2000年
- 7 広島県教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『八反田古墳』 1981年
- 8 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『亀ノ尾第1号古墳発掘調査報告書』 2000年
- 9 世羅町教育委員会『湯船第6号古墳』 1995年
- 10 世羅町教育委員会『近成山第1号古墳調査概報』 1991年
- 11 上下町教育委員会『南山古墳-調査と整備の記録-』 1991年
- 12 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「打堀山遺跡群B地点」『打堀山遺跡群A・B地点』 1997年
- 13 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「東榎木山第1・4号古墳」『門田A遺跡 東榎木山第1・4号古墳』 1999年
- 14 府中市教育委員会『矢谷遺跡・古墳群』 2001年
- 15 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「後池第2号古墳」『城山』 1996年
- 16 広島県芦品郡新市町教育委員会『後池第17号古墳』 1995年
- 17 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「飛渡古墳」『駅家加茂地区内陸型複合団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 1999年
- 18 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「狼塚第3号古墳」『駅家加茂地区内陸型複合団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 1999年
- 19 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「狼塚第4号古墳」『駅家加茂地区内陸型複合団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 1999年
- 20 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「狼塚第5号古墳」『駅家加茂地区内陸型複合団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 1999年
- 21 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「田上第1号古墳」『田上第1・2号古墳』 1997年
- 22 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「田上第2号古墳」『田上第1・2号古墳』 1997年
- 23 大蔭1号墳発掘調査団『大蔭1号墳の発掘調査』 1971年
- 24 銭神古墳緊急発掘調査団『銭神古墳』 1971年
- 25 建設省福山工事事務所 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「高岩第1号古墳」『松永バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1984年
- 26 建設省福山工事事務所 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「鳥越第1号古墳」『松永バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1984年
- 27 福山市教育委員会 福山市埋蔵文化財発掘調査団『大谷古墳』 2000年
- 28 福山市教育委員会 福山市埋蔵文化財発掘調査団『新立古墳』 2000年
- 29 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「坂部第3号古墳」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(VI) 1991年
- 30 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「坂部第6号古墳」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(VI) 1991年
- 31 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「沢田第1号古墳」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(VII) 1991年
- 32 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「沢田第2号古墳」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(VII) 1991年
- 33 広島県教育委員会「永谷第1号古墳」『緑ヶ丘遺跡群発掘調査概報』 1974年
- 34 広島県教育委員会「丁谷古墳」『緑ヶ丘遺跡群発掘調査概報』 1974年
- 35 神辺町教育委員会「迫山第1号古墳発掘調査概報」『神辺町埋蔵文化財調査概報』Ⅲ 1983年
- 36 尾道文化財協会「1号古墳」『大想田山古墳』 1999年
- 37 尾道文化財協会「2号古墳」『大想田山古墳』 1999年
- 38 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『皇渡古墳発掘調査報告書』 1987年
- 39 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「植松第2号古墳」『植松遺跡群』 1987年
- 40 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「植松第3号古墳」『植松遺跡群』 1987年
- 41 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「見尾山古墳群」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(I) 1994年
- 42 三良坂町教育委員会「田戸古墳」『灰塚ダム水没地区遺跡群』 2004年
- 43 三良坂町教育委員会「田戸北第1号古墳」『灰塚ダム水没地区遺跡群』 2004年
- 44 三良坂町教育委員会「田戸北第2号古墳」『灰塚ダム水没地区遺跡群』 2004年
- 45 三良坂町教育委員会「田戸南第1号古墳」『灰塚ダム水没地区遺跡群』 2004年

- 46 三良坂町教育委員会「田戸南第2号古墳」『灰塚ダム水没地区遺跡群』2004年
- 47 三良坂町教育委員会「田戸南第3号古墳」『灰塚ダム水没地区遺跡群』2004年
- 48 陣床山遺跡群発掘調査団「陣床山第5号古墳」『陣床山遺跡群の発掘調査』1973年
- 49 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『寺側古墳』1995年
- 50 三次市教育委員会「岩脇大久保第1号古墳」『岩脇大久保第1号古墳・岩脇大久保遺跡』1991年
- 51 三次市教育委員会「大仙大平山第22号古墳」『大仙大平山第21・22号古墳』2000年
- 52 広島県教育委員会「広島県三次市高平遺跡群発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第9集 1971年
- 53 広島県教育委員会「久々原第10号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 1979年
- 54 甲奴町教育委員会『塚ヶ迫第1号古墳発掘調査報告書』1983年
- 55 広島県教育委員会「国重第1号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1978年
- 56 広島県教育委員会「大原1号遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1978年
- 57 広島県教育委員会「月貞寺古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1978年
- 58 広島県教育委員会「篠津原遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1978年
- 59 広島県教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「境ヶ谷第1号古墳」『境ヶ谷遺跡群』1983年
- 60 広島県教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「境ヶ谷南古墳群」『境ヶ谷遺跡群』1983年
- 61 広島県庄原市教育委員会『広島県史跡 唐櫃古墳』2000年
- 62 広島県庄原市教育委員会『下重行第1号古墳』2001年
- 63 広島県教育委員会「貞末谷第2号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 1979年
- 64 広島県教育委員会「未渡大仙山第5号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 1979年
- 65 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『梶平塚第2号古墳』1997年
- 66 東城町教育委員会「鶴亀山第1号古墳」『鶴亀山古墳群—第1・2号古墳発掘調査報告書—』1996年
- 67 東城町教育委員会「川東大仙山第6号古墳」『川東大仙山古墳群—第6号・第9号古墳発掘調査報告書—』1994年
- 68 広島県教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『楨ヶ峠第2号古墳発掘調査報告』1983年
- 69 犬塚古墳群発掘調査団「犬塚第1号古墳」『犬塚古墳群発掘調査報告書』1980年
- 70 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『井手山古墳』1989年
- 71 東城町教育委員会『鬼橋野路古墳発掘調査報告書』1996年
- 72 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『雨連古墳発掘調査報告書』1998年
- 73 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『金田第2号古墳発掘調査報告書』1999年
- 74 広島県比婆郡口和町教育委員会『池津第1号古墳発掘調査報告書』1979年
- 75 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『宮本古墳』1988年
- 76 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「高塚山第2号古墳」『高塚山第1・2号古墳発掘調査報告書』1987年
- 77 大和町教育委員会『虫送り第1号古墳発掘調査報告書』1994年
- 78 財団法人広島県教育事業団「みたち第3号古墳」『みたち第2・3号古墳』2004年
- 79 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「陣開第2号古墳」『金壳・陣開』1994年
- 80 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「陣開第3号古墳」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(X) 1994年
- 81 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『天高第1号古墳』1983年
- 82 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金壳古墳群」『金壳・陣開』1994年
- 83 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「銭神第1号古墳」『銭神第1・3号古墳発掘調査報告書』1986年
- 84 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『銭神第2・4・5号古墳発掘調査報告書』1987年
- 85 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「銭神第3号古墳」『銭神第1・3号古墳発掘調査報告書』1986年
- 86 広島県教育委員会「宗近柳国古墳」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』1973年
- 87 黒瀬町教育委員会『調査概報 岩幕山古墳』1993年
- 88 河内町教育委員会『二反田第1号古墳発掘調査報告書』1999年
- 89 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『福富中学校裏古墳発掘調査報告書』2001年
- 90 福富町教育委員会『丁田南第3号古墳』1994年
- 91 広島県賀茂郡豊栄町教育委員会「宮ヶ迫古墳」『広島県賀茂郡豊栄町埋蔵文化財基礎調査報告』1972年
- 92 広島県賀茂郡豊栄町教育委員会「光福寺古墳」『広島県賀茂郡豊栄町埋蔵文化財基礎調査報告』1972年
- 93 広島県教育委員会「広島県賀茂郡八本松町藤が迫遺跡群発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第9集 1971年
- 94 建設省中国地方建設局広島国道工事事務所 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大楨第2号古墳」『大楨遺跡群』1985年
- 95 広島県教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「奥田大池古墳」『奥田大池遺跡』1983年
- 96 東広島市教育委員会「助平古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』I 1992年
- 97 ①広島大学統合移転埋蔵文化財調査委員会「鏡東谷遺跡の調査」『広島大学統合移転埋蔵文化財発掘調査年報』II 1983年  
②広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室「鏡東谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書』I 2003年
- 98 広島県教育委員会「蓮道第2号古墳」『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告』1975年

- 99 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「原田岡山古墳群」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(X) 1994年
- 100 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「志村遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(VII) 1992年
- 101 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「志村西古墳群」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(VII) 1992年
- 102 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「胡麻1号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』I 1990年
- 103 塚土古墳発掘調査団「塚土第2号古墳の調査」『朝日ゴルフクラブ広島コース建設予定地内遺跡発掘調査概報』1989年
- 104 塚土古墳発掘調査団「塚土第5号古墳の調査」『朝日ゴルフクラブ広島コース建設予定地内遺跡発掘調査概報』1989年
- 105 塚土古墳発掘調査団「蛇迫山古墳の調査」『朝日ゴルフクラブ広島コース建設予定地内遺跡発掘調査概報』1989年
- 106 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「奥今田第1号古墳」『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(I) 1997年
- 107 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「奥今田第2号古墳」『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(I) 1997年
- 108 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「奥今田第3号古墳」『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(I) 1997年
- 109 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「奥今田第4号古墳」『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(I) 1997年
- 110 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「奥今田第5号古墳」『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(I) 1997年
- 111 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「立石第1号古墳」『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(I) 1997年
- 112 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「立石第2号古墳」『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(I) 1997年
- 113 広島県教育委員会「石塚第1号古墳」『石塚古墳発掘調査概報』1974年
- 114 広島県教育委員会「石塚第2号古墳」『石塚古墳発掘調査概報』1974年
- 115 広島県教育委員会「有岡谷1号古墳」『城が谷遺跡群発掘調査報告』1973年
- 116 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「登古墳」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(I) 1991年
- 117 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「東山古墳」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(I) 1991年
- 118 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団「龍岩古墳」『龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書』1976年
- 119 吉和村教育委員会「田中原第4号古墳」1992年
- 120 広島県教育委員会「倉重古墳」『広島県文化財調査報告書』第14集 1983年
- 121 財団法人広島市文化財団『塔の岡古墳群』1999年
- 122 広島県安芸郡海田町教育委員会「畝観音免第1号古墳」『畝観音免古墳群』1979年
- 123 広島県安芸郡海田町教育委員会「畝観音免第2号古墳」『畝観音免古墳群』1979年
- 124 広島県教育委員会「塩瀬神社裏古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 1982年
- 125 八千代町教育委員会『新宮遺跡群発掘調査報告書』2000年
- 126 土師埋蔵文化財発掘調査団「鳥越古墳」『土師 土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告 1969年度』1970年
- 127 土師埋蔵文化財発掘調査団「権現第1号古墳」『土師 土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告 1969年度』1970年
- 128 土師埋蔵文化財発掘調査団「桑の木古墳」『土師 土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告 1969年度』1970年
- 129 土師埋蔵文化財発掘調査団「七郎谷第1号古墳」『土師 土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告 1969年度』1970年
- 130 土師埋蔵文化財発掘調査団「七郎谷第2号古墳」『土師 土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告 1969年度』1970年
- 131 土師埋蔵文化財発掘調査団「七郎谷第3号古墳」『土師 土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告 1969年度』1970年
- 132 土師埋蔵文化財発掘調査団「新開第2号古墳」『土師 土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告 1969年度』1970年
- 133 土師埋蔵文化財発掘調査団『土師 土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告 1972年度 大迫古墳』1973年
- 134 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「粒原第2号古墳」『粒原第2・3号古墳発掘調査報告書』2001年
- 135 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「粒原第3号古墳」『粒原第2・3号古墳発掘調査報告書』2001年
- 136 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『法恩寺南古墳』1984年
- 137 広島県教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『烏ヶ尾第1号古墳発掘調査報告』1983年



a 遺跡遠景(南から)



b 全景(調査前, 南から)



c 同上(調査後, 南から)





a 墳丘土層  
(東西方向西半, 南から)



b 同上  
(東西方向東半, 南から)



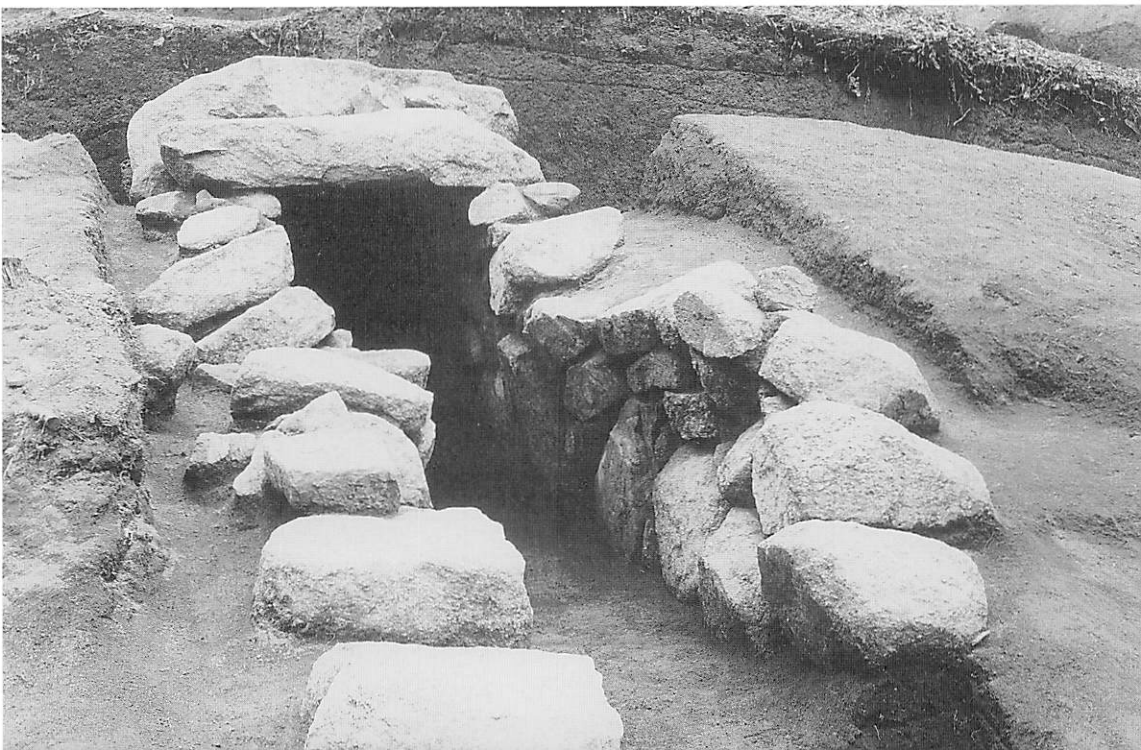
c 同上  
(奥壁背後, 東から)



a 石室全景 (南から)



b 石室西側壁 (南東から)



c 石室東側壁 (南西から)



a 墳丘全景（南西から）



b 石室内部（南から）



c 閉塞石・平瓶出土状況  
（東から）

a 石室基底石（南から）

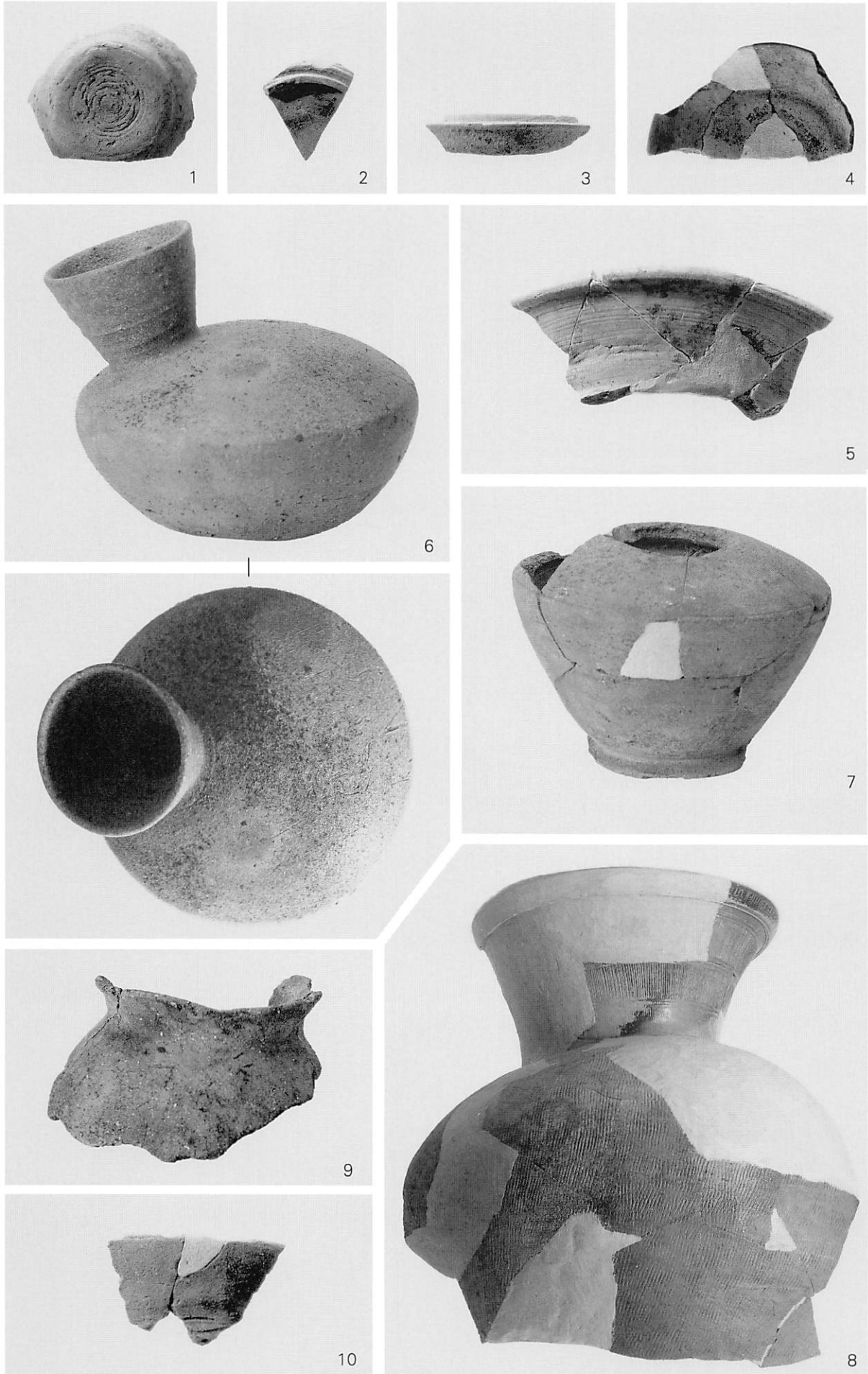


b 同上（東から）

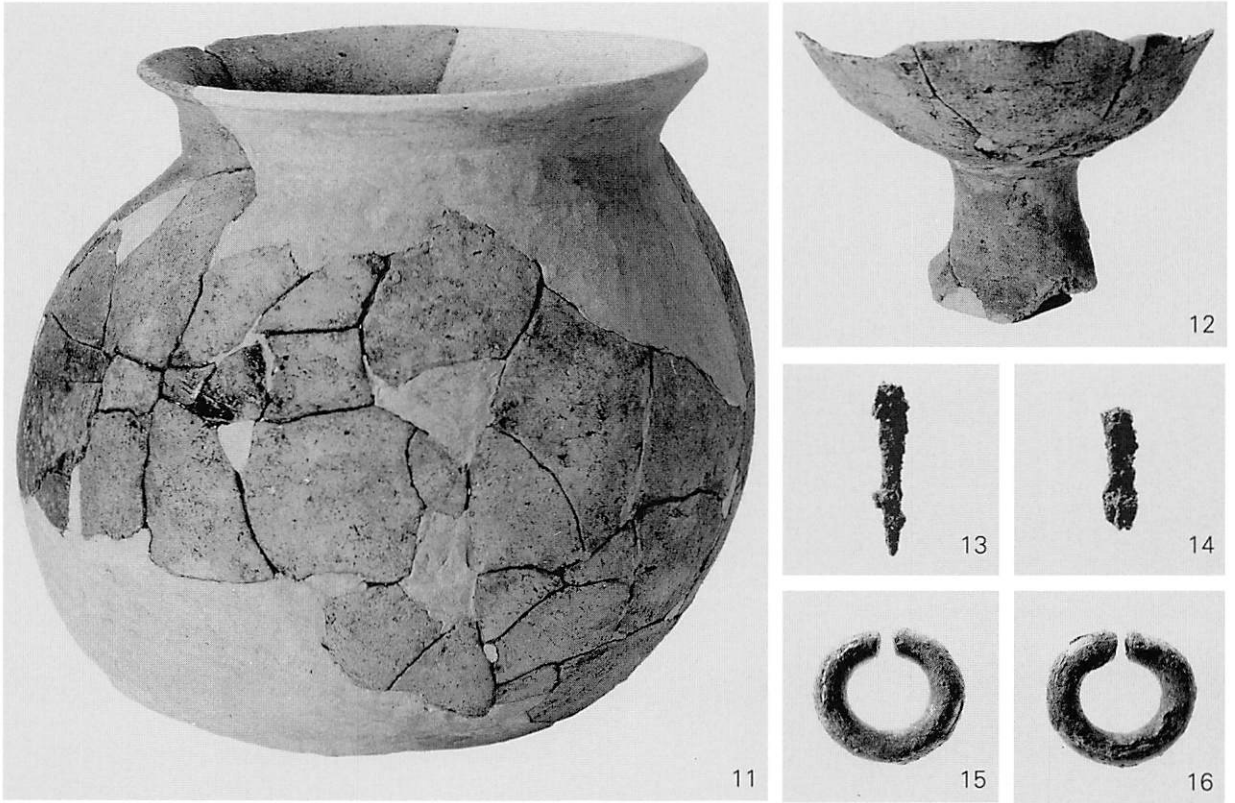


c 石室掘方（南から）





出土遺物(1)



出土遺物(2)

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはくつちようさほうこく							
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	3							
副書名	池ノ奥古墳							
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	梅本健治							
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8-49 TEL 082-295-5751							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
池ノ奥古墳	広島県世羅郡 世羅町大字宇津戸	34462	34461 -280	34° 33' 42"	133° 7' 17"	20040823 ～ 20041028	400	中国横断自動車道尾道松江線建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
池ノ奥古墳	古墳	古墳時代	古墳(横穴式石室)	須恵器(杯・杯身・甕・平瓶・台付長頸壺・大甕), 土師器(甕・高杯), 鉄釘, 耳環		上下2枚広口積みを立て重ねた奥壁, 玄室の縦長に立てた基底石。側壁中央の立石による玄室と羨道の区別。		
要約	<p>芦田川北岸の丘陵谷頭部の緩斜面に立地する直径9～9.8mの円墳。北側背後に幅0.5～2mの周溝が半円形に廻る。埋葬施設の横穴式石室は南に開口し、全長6.12～6.6m、玄室長3.4～3.48m、玄室幅(奥壁)0.84m、玄室高(奥壁)1.52mの狭長な石室である。石室側壁の中央に立石があり、この石を境に基底石の据え方や基底石上の石積みの状況が異なることから、玄室と羨道を画する石とみられる。奥壁は大型の石材を上下2段に広口積みし、玄室側壁は縦長・広口積み主体の基底石の上に4～5段小型の石材を横積み・小口積みする。羨道は横積み・小口積み主体の不整形な基底石の上に1～3段小型で不揃いの石材を小口積み・横積みしている。羨道先端に閉塞石の残欠がある。遺物は全体に少なく、玄室内から耳環2・鉄釘、羨道から須恵器(平瓶・台付長頸壺など)・鉄釘、周溝・墳丘から須恵器(杯身・甕・大甕)、土師器(甕・高杯)などが出土した。平瓶・台付長頸壺などは追葬に伴うもので、石室西側の墳丘裾から破片が集中的に出土した大甕などから、古墳の築造は7世紀初頭～前半頃と考えられ、7世紀中頃～後半に追葬が行われたとみられる。平野部から隔絶した立地、奥壁・側壁の用石、長さの割に幅が極端に狭い石室の狭長性、石室内出土遺物の少なさ、石室側壁中央の立石の存在にみられる玄室と羨道の区別の認識などに特徴がある。</p>							



財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第19集  
中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告(3)

池ノ奥古墳

発行日 平成19(2007)年3月31日  
編集 財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室  
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号  
TEL(082)295-5751 FAX(082)291-3951  
発行 財団法人 広島県教育事業団  
〒730-0011 広島市中区基町4番1号  
TEL(082)228-8451 FAX(082)228-8441  
印刷所 朝日精版印刷 株式会社  
TEL(082)277-5588 FAX(082)277-1143